

鉄道教師が単純にガルパのみんなとハーレムになれるわけなかった

スタプレ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

社会問題から鉄道知識が必要になった世間で、2つの学校から講師を依頼された栄生学。そして教える相手は、地元のガールズバンドパーティーの子たち。

一見ハーレムに見えるが、現実はそうではない。非凡か平凡か分からない日時生活が今繰り広げられる！

そして覚えても無駄にならない鉄道知識も学ぼう！

目次

1話	二兎追うものは多分強制的に追わされる	1
2話	屋内でグラスンかける	9
3話	突撃！近所のライブハウス	16
4話	助けが欲しい時の合図	25
5話	特急のシステムを理解しよう	33
6話	オリジナルのメロディを作ろう！	40
7話	海に行きたい	47
8話	江ノ電で鉢合わせること	54
9話	テストの時間じゃゴラア！第1弾	60
10話	サコデイ先生爆誕！	64
11話	青春を謳歌する方法	70
12話	関西五大私鉄の旅（前半）	77
13話	関西五大私鉄の旅（後半）	84
14話	結成！発案者と被害者と参入者と訪問者	91
15話	分裂！ホーンにこだわる少女達！	96
16話	こなせる人こそ立派な使い手	103
17話	テーマパークでもある鉄道要素	107
18話	誰が客を乗せると言った？	112
19話	ありがとう…そして、さよなら！	117
20話	混乱を招く山陰旅〜タイムスリップ〜	121
21話	混乱を招く山陰旅〜城崎で起きた矢先、出雲での異常〜	126
22話	混乱を招く山陰旅〜終焉〜	130

1話 二兎追うものは多分強制的に追わされる

世界はあらゆる資源で成り立っているのはご存知のはず。その中でも国の発展に欠かせないのが化石燃料だ。

特に石油は原材料、燃料の1つだが、限られた数しかもうない。

そこで政府は原料や交通機関の燃料に最優先させるため、マイカーの自粛対策を始めてきた。

当然景気も下がるは利便性が下がるはで国民から反発をくらっていたが、いずれにしても無くなるものだから早めに対策をするのに越したことは無い。

まあ俺には関係ない。

鉄道について語ったり、旅したりする動画投稿者には興味ない話。

高校を卒業してからは動画投稿に励んでいる。元々学生時代からやっているのです、収入は安定している。

一人暮らしの小さな部屋に電子機器、鉄道模型、更には廃車された電車の部品も置いてある。

そして指令室みたいになぶぎけて電話が5つ置いてある。たまに架空請求業者から同時に電話が来た時はスピーカーモードにしては、目の前に繰り広げられる喧嘩に笑いを堪えて楽しんでいる。

そしてある昼間に2台同時に電話が掛かる。

「はい、もしもし。」

どうせセールスだから適当に出てぶち切る。

『そちらは栄生 学様のお宅でよろしいでしょうか?』

「はい、そうです。」

ちなみに栄生 学はわしの名前な。覚えといて。

『私花咲川女子学園の理事長 花子と申します。』

『私羽丘女子学園の理事長 矢場 徹美と申します。』

やべえ... 同時に学校から電話来たんだけど...

「な、なんの用でしょうか?」

『我が学校で鉄道知識の講師になって貰えないでしょうか?』

某月曜日

「栄生くん。いきなり呼び出してすまないね。」

「ホントにすまないと思うなら協議で兼任させることはしないですよ。」

「まあまあそう言わずにく君男の子だからハーレムになると思うよこの〜。」

「一社さん。今日限りで辞めs...」

「冗談だよ冗談。早速だけど確認テストだけしてもいいかな？」

「... まあいいですけど。」

ざっと見た感じ問題はこんな感じだ。

Q、電車は何をエネルギーに動いている？

Q、東海道新幹線の列車名全て答えよ。

Q、リニア中央新幹線は2027年開業でどこどこを結ぶ？

「舐めてますかこれ？」

「生徒と同じものをやってもらっているだけだよ。けっして君用のテストでは無い。」

問題は進むごとに難しくなってきた。満点は厳しいかもしれないが、東京都民だったら半分ぐらいは出来る問題だ。なぜならニュースを見れば分かる問題が大半だったから。

早速「出来ました」と言って一社さんに渡す。

そしてすぐ採点だ。

「... うん。流石だね。」

「まあこれぐらい出来なくては教師なんて務まりませんよ。」

「あらー！もう教師魂が宿っているわ！早速明後日からお願いね。」

「ちなみにどれぐらいの生徒に教えてるんですか？」

「このテストで赤点の人を各学年に1日1回教えてね。内容は鉄道ファンの知識が備わる程度で。」

「赤点は何点ですか？」

「30点。」

なんか嫌な予感しかしないんだけど...

そして羽丘に向かう時。女子高なんて縁の無いものだと思っ
たから道が分からない。知ってる訳がない。迷子ですよ。犬のおま
わりさん来て！

つとバカなことを考えていたら、ちょうど花女の子が5人いたので
道を尋ねることに。

「すみません。羽丘女子学園に行きたいですけど…」

「まさか変質者!?!」

しまった。普通こうなること忘れてた。

「ちよつとアリサ！それは失礼だよ！」

金髪の子と猫耳?の子が言う。

「羽丘はこのまま真つ直ぐ行けば着きますよ。」

ポニーテールの子が説明してくれた。

「ありがとう助かるよ。」

「それでなんで羽丘に?」

「新しく先生をすることになったからだよ。ちなみに花咲川もね。」

「そうなんだく私戸山香澄！よろしくね！」

猫耳少女が近づく。いや、近い近い…

「私をキラキラドキドキさせる授業をしてね！」

なんだキラキラドキドキする授業って?!

はつきり言おう。意味わかんないけど期待に応えられそうにない
な。

「よく来てくれたね。」

「よく来ましたよ。」

早速羽丘の理事長室に入らされて矢場さんに挨拶する。

「早速だけど確認テストを受けてくれない?」

「分かりました。これも生徒たちはやりました？」

「そうだよ。これも・・・と言うことは花女でもやったのかな？」

「そうです。正直簡単でしたね。」

「じゃあ君ならこれも簡単だね。」

早速受けると・・・

Q、世界には沢山の線路幅がある。日本の軌道4種類の幅全て答えよ。

「・・・」

Q、私鉄総合距離トップ3を正しく答えよ。

「・・・」

Q、元々廃線の危機だったJR富山港線を何をして黒字復帰をした？

「・・・ 矢場さん。」

「あら、栄生くんどうしたの？」

「この問題レベル高くないですか？」

「栄生くんは分からなかったかしら？」

「いや、分かりますよ。でも初心者には厳しいですよこの問題。」

正直たまに頭を捻る問題もある。

「うちは進学校だからね。」

なんで進学校が鉄オタしか知らない知識のテストをするんですか。

「それで赤点50点の平均72点なのよ。」

おかしいよこの学校。もう教師する必要ないよね？

「それで栄生くんはどう・・・流石ね。満点じゃない。」

「はい、何とか頑張りました。」

「じゃあ早速学校を案内しようかしら。」

「よろしくお願いします。」

矢場さんと一緒に理事長室を出る。そして隣にある職員室に入った。

「ここが栄生くんの机ね。吹上先生。栄生くんのことよろしくね。」

矢場さんが隣に座っていた女の人に声をかける。吹上先生と呼ばれた人はこちらを見る。

見た感じ歳は結構近そうだ。

「私は吹上ひなたと言います。分からないことはなんでも聞いてね！」

「栄生学です。よろしくお願いします。」

「早速中を案内するよ。」

吹上先生の案内で広い校内を歩く。元々地理は得意だからあまり迷うと言うことはなさそう。

「栄生先生は今何歳？」

「まだ18歳です。」

「うぐぐ… 私よりも歳下…」

「吹上先生はどう… 「聞くなー」 あ、はい…」

教室や実技室。購買など寄った。購買はかなりの争奪戦になるだとか。弁当を持ってくる生徒も入れれば、食堂に行く生徒もいるらしい。

「ここは屋上も入れるよ。」

「結構豪華なんですね。」

こんなしつかりした学校の教師なんてやっていいのか？

「あーミタケさんとアオバさん！またサボって！」

「あ、これはこれはひーたん先生。」

「別にいいじゃないですか。」

早速不良生徒？を発見したぞ。

「なんでここに男の人がいるんですか？」

ミタケと呼ばれた女の子は俺の存在に気づく。早速睨まれたが、それは大蛇の目と言ったらわかりやすいだろうか？

なんか女子高生って怖くない？

「新しく先生をやることになったんだ。栄生学だ。よろしく。」

「ふーん。」

聞いたわりには興味無さげだなおい。

ちようど昼休みを伝えるチャイムが鳴る。

「あ、お昼休みだ。ラン、行こ〜」

「うん。トモエたちが待っている。」

「あ、ちよつと！」

吹上先生の呼び止めも虚しく、2人は階段に消えてしまった。

「なんか個性が強い生徒ですね。」

「まーアオバさんはあれでも成績優秀だから文句が言えないのよね。」

マジかよ。人は見かけで判断しちやいけないのがよく分かりました。

「ところであの子達には教えなくて大丈夫ですよ？成績優秀なら…。」

「あら、確か補習対象だったわよ。」

嘘やん…

俺の教師ライフがもう危険信号が表示されている…

これ上手くやれるかや？

確認テストの答え（上から順です）

電気

のぞみ、ひかり、こだま

品川から名古屋

762、1067、1372、1435 単位は全てmm

トップから近畿日本鉄道（近鉄）、東武鉄道、名古屋鉄道（名鉄）

（2019年現在）

（解答例）元あった線路に路面電車を走り始めた。

オリキヤラ辞典

栄生学（さきこう まなぶ）

この話の主人公。鉄道系動画投稿者でもある。2つの学校から鉄道教諭として講師を依頼された。最近の趣味は架空請求業者同士の

バトルを観戦すること。

一社花子（いつしや はなこ）

花咲川女子学園の理事長。自称お姉さん。

矢場徹美（やば てつみ）

羽丘女子学園の理事長。一社とはビジネスフレンド。やはり自称お姉さん。

吹上ひなた（ふきあげ ひなた）

羽丘の先生。年齢は黙秘されている野原み〇え状態。

2話 屋内でグラサンかける

「それで何教えればいいんですか？」

職員室に戻った俺らは昼ごはんを食べながら話をする。

先生も食堂を使ってもいいらしいが、生徒たちに人気のため自前の弁当を持ってくる人が大半。

「ちよつと待って、理事長からファイルを預かっているんだ。」

吹上先生がファイルを渡してくれる。

「えーつと……首都圏の鉄道概要？どの方向に行くか？特急について？めっちゃくちやハードル高いですよん。」

「鉄道会社の就職も有利にするんだって。」

「確かにエリートになって自動車関連の会社に入っても未来はないからな。」

「そういうこと。」

「進学校だからこの内容でも文句ないのか……」

「早速5時間目からお願いね。場所は3階の第3教室ね。」

「第3ですね……了解です。」

もらったファイルには名簿も載っている。さつき見た美竹さんと青葉さんの名前も載っていた。

5時間目が始まるチャイムが鳴ると同時に指定の教室に着いた。

今日は軽く自己紹介と知識の確認だな。

ガラガラ

「……What's?」

誰もいない……

最初からサボられたんですけど……

嘘やん。あの美竹さんと青葉さんならまだしも全員に逃げられるとは。

教卓に物を置くところある程度探してみた。もちろんいるわけない。カバンからサングラスとスマホを取り出して、教室にあつた教師用の椅子に座る。

そしてメガネからサングラスに替え、動画の撮影準備が出来たら例のあれをやる。

「おいー！ー！す、どうも！サムです。まあ今日はあ…授業当日ですけども。えーっとですね…場所の第3教室。受講者は誰一人、来ませんでした…。」

まさか2代目が自分になるとは思わなかった。

「なんでですかね…何が行けなかったんでしょうか…？」

さてこんなおふぎけをしていたら誰かが来るのは決まったことだ。

「栄生先生！ごめん第2だった…って何してんの？」

自分の顔が綺麗に90。向く。ドアにいたのは吹上先生。

「吹上先生。見なかったことにしてください。」

「あ、うん。了解。」

何かを察してくれるのはありがたい。だが、悲しい。

「えー…僕の名前は…栄生学と言います。恐らく皆さんが卒業するまでは担当すると思うので、嫌がらず頑張ってください。」

あの時のあれでまだ動揺しています。決して気まずいわけじゃないよ。

「じゃあ1人ずつ簡単な自己紹介をして貰おう。名簿の早い方から、名前と何か一言。」

「は〜い。青葉モカです。モカちゃんって呼んでくださいーい。」

「え？モカちゃんって呼ぶの？」

「だってモカちゃんにはモカちゃんですよ？」

「いやそうだけだよ…流石に1人だけそう呼ぶのもちよっと…他のみんなもちやん付け嫌だよね？」

『…』

返事はないけど俺分かるよ。その視線は完全に嫌がっていることをね！

「困ったな… 下の名前でさん付けで勘弁してくれないか？」

「じゃあそれでいいよ」

意外と交渉成立したな。この少女は少し謎だ。

「OK、じゃあ次お願い。」

自己紹介が終わったら、テストで多くの人が間違えたところを解説。特に変わった内容はしてない。そもそもこの内容をしていることが変わっているのか…

そしてそのまま2年生の授業もする。

「それで… 近鉄は2府3県を結ぶ大きな会社… って友希那さん！開始から5分で寝ないで下さい！」

「ちよ… 友希那く起きてだつて」

「んーリサどうしたの？」

「どうしたの？じゃないよ。いくらつまらなくても寝るの早すぎだよ。」

「だつてRoseliaには関係ないもの。」

「Roseliaって何？」

「あくそれは私たちが組んでいるバンドなんだよ先生。」

「そうなんだ。それは置いといて、とりあえず寝ないように頑張つて。」

「でもこれるん♪つて来ないからつまんなーい！」

友希那さんとリサさんと話していると、離れたところから声が聞こえた。

「日菜さん。るん♪つてなんのこと？」

「るん♪はるん♪だよー！」

いやわかんない… でも楽しそうな表現だつてことは分かる。

つまりこれ面白くないの… 凹みますね

「ぬわああああん疲れたぬおおおん！」

「お、おつかれ…」

やっと職員室に戻れた…気がする。

「もう辞めたくくなりますよ仕事」

「人材ないからやめようね！」

吹上先生が現実を突きつけて来る。そりや人がいれば、動画投稿者に声なんてかけないからな。

「それじゃこれで失礼します。」

「おつかれ！またよろしくね。」

明日は花咲川かあ…

「おはようございます」

もう女子高怖い。

一応先生だけど、年が近いから校門入って1回。昇降口まわって1回。職員室に入る前に1回警備員に捕まったからね。

なんでもう疲れなきやならないんすか。

「君が栄生学先生ですね…ってどうしたんですか。」

「朝に警備員さんに何回か捕まられたので…」

「あはは…この学校に男性はいないからね」

「嘘!?先生すら男のいないんですか!?!」

くっそ気まづいわ…

「そう言えば先生の名前伺ってもよろしいですか？」

「あ、ごめんね。私は鶴舞恋華。」

「鶴舞先生。よろしくお願いします。」

「分からないことは聞いてね。」

机にあった名簿と授業の内容が書いてあった。

「結構簡単な内容なんですな。」

「あ、そうなの？私も見たけど難しくて…」
「いえ、鉄道知識がイマイチ分からない人はこれぐらいがいいと思いますよ。羽丘がレベル高すぎて…」
「流石先生ですね。じゃあ早速この上の教室で、2年生からお願いね。連続で1年生もあるから。」
「分かりました。」

さて、2年生の授業を終えて1つ思った。
髪の色凄くね？

ピンクとか水色があつたよ!?生徒指導の先生が巡回しても何も言わないっということは、地毛だということ？

今の日本人は分からない。ワイも日本人だけど…
そしてリアルタイムで猫耳少女がいる。

髪型も自由なんだ。

「この前会った先生ですよね？」

「この前…あー道を教えてくれた子が？」

確か香澄さん…だったかな？

「何かキラキラドキドキした電車はありますか？」

「キラキラドキドキ？それは物理的な意味でかい？」

「違いますよ。こいつのキラキラドキドキは感情みたいなもんです。」

横から金髪ツインテールの子がきた。何がとは言わん。でかくね？

「えっと…君は…」

「市ヶ谷有咲です。香澄の保護者やってます。」

「有咲さんね。よろしく。」

保護者やってる割には楽しそうに見えるけどな。

「それでキラキラドキドキの意味分かったよ。と言われても難しいなあ…君は猫耳型の髪だから猫好き？」

「これ猫じゃないです！星をイメージしているんです！」

「え!?星?」

どう見ても… いや、もういいや。

「星ならば… SL銀河号があるね。」

持ってきたタブレットで写真を出す。

「これは銀河鉄道の夜をイメージしているんだ。じゃあ… その子。銀河鉄道の作者は知ってる?」

香澄さんと有咲さんの隣にいた子に聞いてみる。

「宮沢賢治さん… ですよね?」

「そう。この列車は宮沢賢治の出身地の近くを走っているんだ。」

そして橋を渡っている写真も見せる。

「この橋は銀河鉄道のモデルになった橋なんだ。夜にここを走るSLは美しいんだ!」

「他にありませんか?」

香澄さんが興味津々に聞いてくる。お兄さん嬉しいゾ

「名前だったらこの新幹線! 『STAR21』」

「うわあ! カッコイイね。」

「俺も好きな新幹線の1つなんだ。」

「私これに乗りたい!」

実は新幹線には大きく分けて3種類ある。1つは営業用。2つ目は検査用。俗にいうドクターイエローとかだね。

そして3つ目は…

「これは試験用だから一般の人は乗れないんだ…」

「えー!」

「さらにもう昔の車両だから走ってすらないんだ。」

「そう… なんだ。」

「でも見ることは出来るよ。今は米原に保存されているんだ。」

試験用とは、新たな技術を詰めまくって作った車両。どの試験用も上げつない速度を出すんだ。そしてそこから得た情報を元に、新しい新幹線を作る。

「なあ… 違う種類の新幹線があるんだけど…」

有咲さんが別の車両の写真に指差す。

「これも同じSTAR21だよ？」

「全然違う顔だ…」

試験用だから沢山の試したい事をいっぺんにやる。顔が違うのも、どの形がスピードが出やすいか？空気抵抗はどうだ？消費電力等の違いを調べるんだ。

そして採用された顔はさらに改良して新しい新幹線に。不採用だと幻の顔になる。

でも歴史を作ったことには変わらないので、どっちの顔も大切に残されている。

「もつと話したいことは山々あるが、休み時間終わるから席につけろ。」

「もつと新幹線のこと知りたいのにく。」

「じゃあ今日の授業は新幹線のことをやるか！」

悪くないね。こういうのも！

オリキャラ辞典

鶴舞恋華（つるまい れんか）

花咲川女子学園の先生。栄生の案内役でもあり、実は吹上とも知り合いである。名の由来には叶わなかった…

3話 突撃！近所のライブハウス

「あのくお客さん。ライブに興味ありませんか？」

「ライブ…好きなアーティストはいないので行ったことはないですね。」

近くに商店街があるのはいい事だ！（唐突）

そしてパン屋さんに寄って帰ろうとしたら、店主にライブの話を持ちかけられたのだ。

「よかったら近所のライブハウスでイベントがあるので行って見てはどうですか？」

店主からチケットをもらおう。

「カバー楽曲祭？アニソンJPOPやボカロなどのカバーねえ…これならいいかも。」

「本当ですか？ぜひ行ってみて下さいー！」

さて、ここが会場の『CIRCLE』ですか。

ライブハウスは暗くて怖いというイメージが強いんだが、ここは全て逆だ。

だってカフェテリアもあれば、足湯もある。こんなライブハウスは他にもありますか？あつたらすみません。

「いらっしやいませ…おや男性の方は珍しいですね。誰かの関係者ですか？」

受け付けでちょうど同じ年ぐらいのスタッフに声かけられた。

「いや、商店街のパン屋さんから頂いたものでね。興味があるもんで来ただけよ。」

決してやましいことは考えてない。

「パン屋…なるほど、これは失礼。ここは女性の方が多くてね。男

性でも親御さんとかしかいないから私も少し気まづくてね。」

本来ならダメな接客だが、俺も男だからかな？このスタッフの気持ちは何となく分かる。

「私はこのスタッフ曲 星。どうぞよろしく。ところであなた…どこかで見た事あるような…」

「俺は栄生学。鉄道系動画投稿者プラス2つの学校の先生をやっている。」

「そういうこと！あなたの動画見た事ありますよ！」

「それはどうも。」

「おっと、長くなってしまいました。入り口はあちらなので、好きな飲み物を頼んでから入って下さい。」

「へー飲み物も貰えるんだ〜」

曲にまた来ると言ってドリンクバーに行く。

そこで出演者が控え室からぞろぞろと出てきた。

「あれ？栄生先生だ！こんにちは〜！」

「香澄さん？こんにちは。君たちもライブを観に来たのかい？」

「いえ、私たちも出るんですよ！この5つは知ってると思うので、是非楽しんで下さい！」

「…お、そっか…」

やっちまったよお…

小学校の先生が教え子の何かを見に行くならいいんだよ。だけど高校の講師が異性の教え子のライブを観に行くってあからさまに変態教師の異名がつくやんか…

まあ後ろにいればいいか。

いくつかのバンドが出たら、次はPoppin' Partyだ。

メンバーは花女の一年の香澄さん、有咲さん、りみさん、たえさん、沙綾さんだ。

まず彼女達は『ロミオとシンデレラ』ボカロの代表作だ。

甘酸っぱく、切ない恋の表現を上手くしている。うん。香澄さん歌うめえ（語彙力）

次は『God knows...』アニソン百選では外してはならない曲の1つ。香澄さんの力強い歌声もそうだが、ギターのソロがエモい。

あんなギター生では初めてだ...

呆氣にとられていると、曲がペンライトを渡してきた。

「職務放棄に何売りつける気だよ。」

「人聞きの悪いこと言うな。これはプレゼントだよ。仕事に関してはライブ始まると暇になるんだよ。」

そして最後は『Daydream café』あー心がびよんびよんするんじゃないやあで有名な曲だね。盛り上がりをかなり増幅させる。

「ところで何色を振ればいいの？」

「ポピパはピンク色。この後は赤、緑、青、黄色の順だから。」

「そう言えば香澄さん達はよくここに来るの？」

「そうだな。サークルの初ライブも彼女ら出てたよ。特にポピパのみんなには助けて貰ってな...この子達のオリジナルもクオリティ高いぞー。」

「凄いな今の高校生は。」

ポピパの次はAfterglow。メンバーは蘭さん、モカさん、つぐみさん、ひまりさん、巴さん。幼なじみで結成したと曲は言う。

多分今は幼なじみというよりサボリ魔というイメージが強い。

彼女らは『アスノヨゾラ哨戒班』『ロストワンの号哭』のボカロを連続して歌う。

王道ロックという感じだが、それに似合わない高音が別の味を出している。もちろんいい意味だよ？

「同じ高校生でも全く違うんだな。」

「だからガールズバンドが流行ってんだよ。それぞれ良い演奏をしてくれるんだ。」

3曲目は『Don't say lazy』これもアニソン百選に

選ばれる有名曲だ。

ポピパとは違う興奮を覚える前に次のバンドが出る。

P a s t e l * P a l e t t e s は彩さん、千聖さん、日菜さん、麻弥さん、イヴさんがいる。

最初は『ふわふわ時間』。さつき出てきたD o n , t s a y l a z yと同じ、けいおんからの曲だ。

「なんかアイドルみたいだな。こういう方向性なの？」

「アイドルみたいっておま……この子現役のアイドルだぞ。ご存知なかった!？」

「いや芸能界はそんなに興味無いし……こんどサイン貰おう。」

「やめとけ逮捕される。」

なんか辛辣な返しがあつたような……

そして2曲目は『ハッピーシンセサイザ』これもボカロでは有名な曲だね。

「へーユニットなのか千聖さんも歌上手いんだな。」

「言つとくけど、ボーカル以外も歌上手いよ。コーラスとか最高だぜ!」

「マジでレベル高杉イ!」

今まではギターボーカルだったが、彩さんはボーカルだけなので、踊つてもいる。

そして最後は『はなまるぴっぴはよいこだけ』おそ松さーんで叫んで終わります。

次はR o s e l i a。友希那さんリサさん紗夜さん燐子さん。ドラムの子だけは分からない。

「なあドラムの子知ってる。」

もはやスタツフだということは関係なしに、ドリンクをすすつている。コンプライアンス大丈夫かよ?

「あの子は宇田川あこ。中学三年生。巴の妹さんだよ。」

「ほー」

1曲目は『残酷な天使のテーゼ』この曲はアニソン百選に留まらず、一般の人でも有名な曲だ。

Roseliaの音楽は簡単に言うレベルが高い。めちゃくちゃ高い声に、迫力のある演奏。特にドラムは中学生とは思えないテクニクだ。

「まあRoseliaは凄いつて顔だな。音楽業界も注文されるほどの実力も持っているんだぜ。」

「だから授業は放棄してたのか…。」

「いやそれは関係ないんじゃない。」

「だって友希那さん爆睡してたもん。」

「はあ…。」

2曲目『シャルル』、3曲目は『六兆年と一夜物語』だ。

どちらもキツイ高音があるが、難なくこなす。特に六兆年と一夜物語は全ての演奏技術が集まって出来たものと言っても過言ではない。

「こんだけ凄いとオリジナルも聞いてみたくなるな。」

「はつきり言ってプロ並みだよ。別世界ではオリコン獲得してるし。」

「オリコンも…って別世界？」

「あ…ゴホツゴホツ。とりあえずオリ曲のライブあるから気が向いたら来てくれ。」

「…。」

下手くそで誤魔化すライブハウスのスタッフに冷たい視線を送ってからステージに向き直す。

ハロー、ハッピーワールド！はこころさん、はぐみさん、花音さん、薫さん、くまさん…

くまさん!?

「あれ誰が入ってるの？」

「奥沢美咲さん。」

「…」苦労さまだな…。」

さて1曲目は『新宝島』独特なステップを踏みながら入場してくる。くまさん…じゃなかった、美咲さんはキーボードではなくDJをやっている。新宝島には持ってこいの担当だろ。

2曲目は『太陽曰く燃えよカオス』

「ωω」うー！（／ωω）にやー！と観客一体になって盛り上

がる。

「ちなみにセトリ見たから知ってるけど、多分次驚くことやる。」

「何やるんだよ…。」

「まあ見てなつて。」

3曲目は『回レ！雪月花』大抵の音ゲーマーはこの曲で回されたことでしょう。

曲が始まると、こころさんはワイヤーに吊らされて宙に浮く。

「別にワイヤーぐらい何とも…。」

サビに入ると回れを連呼しながら観客席を飛ぶ。

「観客席まで…ええ…（困惑）」

ちなみに目が合うと軽くウインクしてくれた。

そして曲が終わる前にワイヤーの線を断ち切った。

「ちよっ…危ない！」

結構な高さだ。間違いなく怪我するぞ！

でもこころさんは見事に着地成功をする。途中回転交えてね。

「どういう運動神経しているんだ…。」

まあ楽しかったよ。まだ他のバンドもあつたが、知らない人だし、何よりも終わって混雑するのもいやだから早めに撤収する。色々聞かれて囲まれるのもあれだし。感想は授業の時でいいだろ。

曲に挨拶して帰るか。

外に出るとなんか騒々しい。

「おい曲どうしたんだ？」

「ああ…。栄生。実は最後やるバンドのボーカルが熱で倒れたんだよ…。」

「まづいやん！それでどうするの？」

そこでメンバーらしき人がきた。

「彼はせっかくのライブだから辞退したくないと言ってます。でも代わりのボーカルなんて…」

「そういや栄生。お前いい喉してるよな。」

「は!? どういう…」

「なんか歌ってみん。」

「なんかかって…」

とりあえず好きな『夏影』をアカペラで歌ってみる。

「おお… 行ける行ける。」

「てめえふざけてたらぶっ飛ばす。」

「でも上手いですよ! 下手したらボーカルよりも…」

「それはそれでどうかと思うけど…」

「お願いします! あいつのためにも…」

「いやでも…」

「俺からもどうか!」

2人から頭下げられちゃ困るな…

「ああ分かったよ! 歌えばいいんだろ歌えば!」

「アリガトウゴザイマース!!」

「マジでぶっ飛ばすぞこら。」

あれ? 引き受けたのはいいが、何歌えばいいんだ?

「改めまして、『シンシーズ』というバンドのギター担当荒子と言います。」

「同じくベース蟹江です。」

「キーボード北野だよ」

「ドラムの井原でござつす。」

「唐突に歌う事になった栄生です。」

「ゴホツゴホツ… オエ… ボーカル… の… グハツ長久手です。」

「あんたは無理して喋んな。」

それにしてもシンシーズねえ……なんか嫌な予感しかしないんだけど……

「ねえ荒子さん。セトリ見せてもらっていい？もしかしたら歌えないのあるかもしれないから。」

「あ、そうでしたね。これが一覧です。」

一枚の紙をくれる。

「やっぱり3曲歌う。だが……これ本気で言ってるの？」

「あの～この曲って歌詞そのまんまで歌なきやいけないですか？」

「当たり前だよなあ？アレンジなんて加えるだけで許さないゾ。」

「マジっすか井原さん。」

「もしかして歌えないのありましたか……」

「あ、いや！そういう訳じゃ……いけない！急用思い出した！帰らないと……」

「ここは逃走しなきゃ……誰だ腕掴んでるの？」

「逃がしませんよ～」

「このやろう曲！HA☆NA☆SE！」

「まさか聖職である教師さんがお願いを断るわけないですよ～」

おのれえ曲……

奥を見ると逃がしませんという目をしているシンシーズの5人が目を光らしている。

野獣の眼光だあ……

ていうかボーカルも混ざってるじゃん！

「ああ……逃れない（カルマ）」

「じゃあお願いね。栄生さん☆」

マジで曲だけは許さないからな……

オリキャラ辞典

曲 星（まがり せい）

サークルのスタッフ。『山吹色をもっと濃く』の主人公でもある。

ただし当作品と少し異なり、特別沙綾と仲がいいわけではない。あとこの話では元々原住民。

シンシーズ

長久手、荒子、蟹江、北野、井原の5人で形成されているバンド。全員男で、名の通り、ろくな歌をあまり歌わない。よくもまあサークルのライブに出れたなあ。

4話 助けが欲しい時の合図

「お前ら盛り上がってるから〜！」

黄色い歓声が返ってくる。

「今日ラストだから最後までぶっ飛ばして行くぜよろしく!!」

ああ… ついに歌うことになってしまった…

ちなみにガルパのメンバーは舞台裏でポカーンとしている。そりやそうなるよ。客として来ていた先生がステージに立って、ポーカーをやってるから。

ちなみにこのバンドのセトリはニコニコ動画で人気の3曲だ。組曲にも必ずと言っていいほど組み込まれる曲だ。

「まずはこの曲！『エアーマンが倒せない』」

直ぐにギターとドラムの演奏が始まる。

個人的には独特なサビの入り方が好き。この曲は一見ふざけたように見えるが、メロディが神つてるため普通にいい曲だ。

それに多くのゲーマーが共感出来るらしい。昔からゲームをやってる友人曰く、マジで倒せないらしい。

「ありがと〜！」

しよっぱなから高音で辛いが、止めることなくMCに入る。

「皆さん改めまして、『シンシーズです！』」

白色のサイリウムが会場照らす。なんで白色なんだろう？

「それではメンバー紹介！まずはボーカル！本物は風呂上がり裸踊りした関係で風邪を引いたぜ！そのおバカさんの代わりに入ったのがこの栄生だ！」

こんな仕打ち受けたんだ。これぐらいの毒はいいだろ。

そして他の奴らもコールしてやり、1人ずつ軽いパフォと挨拶を言う。

「今日はニコニコ動画で人気の曲をやるぜ！次は『思い出は億千万』サビのコールも忘れるなよ？」

これは泣ける歌。とはいえ、なんかのゲームのBGMに歌詞を付け

たのが元らしい。

「♪何かに追われるように毎日生きている!」

またまた喉をぶっ壊す曲。サビ前なんて叫んでいる同然だからな。まあ曲風的にあっているからいいけど。

「♪君がくれた勇氣は『おつくせんまん!おつくせんまん!』」

他の奴らもコールをしてくれる。最初はタイミングが分からず戸惑う客もいたが、楽器の奴らが教えるようにコールをしたので、徐々に大きい声になっていく。

「いいね!いい盛り上がりだったよ!!お前らまだまだ行けるか!」

さつきよりも甲高い声が返ってくる。

「残念ながら次が最後だ!」

客席から「えー」という声が目立つ。

そしたら知ってるバンドメンバーが全員出てきた。

「君たちどっしたの?」

小声で香澄さんに聞く。

「コールのタイミングとして私たちが教えるんだ。この札の通りにコールしてと言って。」

おいおいマジかよ。

「ちなみにこれ知ってる?」

「今日サビだけ聞いたただだよ。」

ここは知って欲しかったなあ…

はあ、始めるか。

「それじゃ始める前に、この曲を楽しむため少し練習をしよう。今日登場したバンドも手伝ってくれるぞ!」

拍手が起きる。1部は狂うように名前を叫ぶ。

さてレクチャーシーンは割愛して、ここからは本番行くぜ!

もう開き直るしかない。

「行くぜ!東方アレンジから『Help me えーりん』!!!」

まずはドラムの演奏から入る。

「ほんじゃ最後ぶっ飛ばすぞ!はい、ワン、ツーワン・ツ、スリー」

自分が「えーりん、えーりん」と言えばお客さんも「えーりん、えー

りん」と真似をする。

これは東方projectというゲームのBGM『竹取飛翔』からのアレンジ。さっきの億千万と似た理屈だな。

この曲の特徴は右腕を上げて「えーりん」と叫ぶこと。これは実際両者楽しむことが出来る。

ただアレンジ、作詞、歌ってる人が「紳士」なので、後に困った約束がある。

ある程度コールしたらサビに入る。

「♪さくあ、助けましょう！高くあがるあの腕…」

サビのコールは香澄さん達がプラカードを持って教えている。そのおかげでクールダウンすることなくメインの間奏に入る。

「じゃあもつとギアを上げてこうか？俺に続いてみんな真似してね」

まずは本家の「えーりん」から、その後少し文字って、次は因幡コールをやる。日ハムのあの方じゃないからな？

そして東方キャラをある程度やったら次はオリジナルのコール。

「さこう！さこう！」

『さこう！さこう！』

「ミスター、さこう！」

『ミスター、さこう！』

「シンシー！シンシー！」

『シンシー！シンシー！』

「シンシーズ最高！」

『シンシーズ最高！』

こんなこと言いましたけど、最高だなんて微塵も思ってません。

そして香澄さんの所に歩み寄る。

「ポピパ！ポピパ！」

『ポピパ！ポピパ！』

「Poppin' Party！」

『Poppin' Party！』

そこでマイクを渡して無茶振りを掛けた。

一瞬え？って顔はしたけどさすがボーカル。無茶振りにも対応する。

「キラキラドキドキ！」

『キラキラドキドキ！』

「夢を撃ち抜け！」

『Bang Dream!』

すげえ…観客達がちゃんと着いていってる。ポピパのこと詳しいのかな？

そして瞬時で返ってきたマイクは蘭さんの所に持っていく。

「アフロ！アフロ！」

『アフロ！アフロ！』

「Afterglow！」

『Afterglow!』

そしてさっき同じようにマイクを渡す。

「スカーレット、スカイ！」

『スカーレット、スカイ！』

「いつも通り！」

『いつも通り!』

その時モカさんが乱入してきた。

「悪くないね…」ボソツ

「ちよ…モ、モカ！」

とこのようにパスパレ↓ロゼリア↓ハロハピという順番でやっていく。

「パスパレ！パスパレ！」

『パスパレ！パスパレ!』

「パスレルパレット！」

『パスレルパレット!』

「あーや！あーや！」

『あーや！あーや!』

「まん丸お山に？」

『彩りを!!』

「ロゼリア！ロゼリア！」

『ロゼリア！ロゼリア！』

「目指すは頂点！」

『目指すは頂点！』

「ロゼリア！ロゼリア！」

『ロゼリア！ロゼリア！』

「あなた達付いて来れるの？」

『はい！付いて行きます！』

「ハロハピ！ハロハピ！」

『ハロハピ！ハロハピ！』

「ハロー、ハッピーワールド！」

『ハロー、ハッピーワールド！』

「ハロー？」

『ハッピーワールド！』

「ハッピー！ラッキー！」

『スマイル！イエイ！！』

そろそろ終われよという目をされたのでラストスパートにかけていへ。

「はいお○ぱい！お○ぱい！」

『お○ぱい！お○ぱい！』

だからやりたくなかったんだよ！

この曲はお○ぱいコールを言ったら終了の合図。あとはえーりんコールに戻してサビに入る。

つまりお○ぱいを言うことはお約束なのだ。

観客はノリがいいのか？あるいは変態なのか知らないが、ポリューム落とすことなく続ける。

つまり誰も制御が効かないというわけ。でも真横からの目線が冷たいのはなんでなんだろうなあー

こうしてシンシーズの出番は無事終わった。

「ありがとう！シンシリーズでしたあ！また会う日まで！」

この世の中には『終わる』という英語が2つある。フィニッシュとエンドだ。

ライブとしてフィニッシュした。先生としてエンドしたんだ！

だって控え室に戻ったら、ガルパのメンバーからのお気持ち表面があれだったから。

元氣組は「大胆だったね〜」って言われ、冷静組は「最低…。」と言われ、あれがでかい組は赤面して目を合わせてくれない。

そして夜にとある人物からの電話がかかってきた。

「栄生くん。明日学校に来てくれないかい？」

「え…なんでですか？」

「伝えたいことあるからだよ。」

一社さんからの通達だー！

これリストラされるやつだね。

そして次の日

俺は重たい足を引きずりながら花女に向かう。よくよく考えたら先生をやめれるチャンスなのに、なんで渋ってるんだろう…

多分お説教が嫌なのと、警察に突き出される恐怖があるからだと思うけど。

そして理事長室に入ると、一社さんが座っていて、矢場さんが立っていた。

これ同時通達かよ…

「昨日不適切な発言をしたんだって？」

一社さんが単刀直入で聞く。

「ええ…否定が出来ません。」

冷や汗が止まらない。やらされたとはいえ、強引に突破出来た可能性

もあるため、言い訳が出来ん。

「まあほどほどにしてね?」

「はい! ホントにすみませんでしたあ! クビだけは!」

「はあ?」

「へ?」

何言ってるのこいつという顔をされる?・

そう言えば一社さんなんて言った?

「…… クビじゃないんですか……?」

「何を早とちりしてるの? あなたをクビにするわけないじゃない。」

「そう…… なんですね…… てっきり解雇通知をされるかと?」

「あながち間違つてはないけどね。」

「どういう意味ですか矢場さん。」

クビじゃないけど間違つてないって……

「実は授業的な問題で、国からの通常授業が許されないの。」

あれほどマイカー自粛を促してそれはないだろ。

「それでああなたが学校で授業が出来なくなつたの。」

「それじゃ僕はお役ごめんじゃ……」

「勉強させる方針は変わらないのよ。でも放課後などにやっても圧倒的に時間が足りなくなるの。」

「そこで花女さんと羽丘が合同ですればいいと。考えたのが塾みたいな感じで授業をすることよ。」

なるほど。確かに名案だ。

どっちかの高校に行つてしまえば、もう片方の授業が進まない。一緒にやっつてしまえば、例え1日1時間しか出来なくても、週4でやれば倍の時間が確保出来る。

「僕もその方法は賛成です。でもどこでやるんですか?」

「商店街の近くに塾があったからそこを確保しといたわ。」

「居住も出来るから、引越してもいいし、元あった家と2つ所有でもいいわ。」

「ありがたいですけどいいんですか?」

「私たちが無茶なお願いしたもの。それぐらいはさせて欲しいわ。」

本当にありがたいけど、両者金持ち過ぎだろ。
ちなみに光熱費等も負担してくれるらしい。
凄いな理事長…

おまけくライブ後のシンシーズ楽屋く

「色んな意味で終わった…」

「お疲れ様でした栄生さん！」

「おつかれ荒子さん… 僕はもう疲れたよ…」

「栄生の歌は良かったよ！うん良かった！」

「てめえだけは許さんから曲！」

「なんで俺だけ!？」

「それにしてもとんでもないものを歌わされたよ。」

「でもいい盛り上がりでしたよ？」

「フオローになってないから北野さん。」

「でも本当は違う歌をやりたかったんですよ…」

「… 何をやりたかった？」

「最近ゆゆ〇たさんを尊敬してるっす。例えばこの世の終わりみたい
なインスタ投稿や一般男性脱〇シリーズとかでござっす。」

「マジでそんなのやろうとしたらどんな手を使ってもいいから絶対に
逃げるからね？」

「あとはやらないかとか…」

「勝手にやってくれ…」

5話 特急のシステムを理解しよう

「なかなか立派な建物じゃねーか。」

外見は薄い水色で塗られていて、三階建てのまままあでかい建物だ。

もらい物としては充分過ぎる。ちなみに引っ越ししたかったけど、謎の電話システムや模型等を動かすのが面倒いという理由で、ここに行き来することに。

ここでも泊まれるようにもしてくれている。

いい建物だが、目印のものが無い。一社さん曰く、看板はそのうち持っていくと。

そして生徒たちには事前に知らせているとか。

早速入ると、もう集まっていた。

この塾にしてからは1年、2年は合同。さらに2校合わせても30人満たないので、全て合わせても問題ない。

「みんなこんにちは〜。」

「栄生先生こんにちは〜。」

近くに居た彩さんが返してくれた。

あんな卑猥なこと言っても引かれないのは、あのライブの後にシリーズの人達が、「強制的に言わせたから、栄生さんを責めないで欲しい」って弁護してくれた。

本来の意味でも紳士っぽくて助かったが、曲というスタッフだけは最後まで嘘を貫こうとしていた。だから軽くスネを蹴ってやった。

痛そうだったな〜

「栄生先生聞いて下さい！今度ロケで特急電車に乗るんですよ。」

「どこに行くの？彩さんだけ？」

「そうですよ。松本で旅ロケする見たいです。確か『あずさ』っていう名前だったと思います。」

「よく知ってるね。」

「もう切符をもらって、そこに書いてあったから。でもこのマークの意味が分からなくて…。これはなんですか?」

切符には号車番号、座席番号の隣に四葉みtainなマークが書かれていた。

さすが芸能人…

「そのマークはね…」

「あー!!!」

「どうした香澄さん!」

「この前高尾山に行った時に乗った特急のお金払ってない!」

高尾山まで何しに行ったの…。まさかライブ?

「あたしは華道で宇治に行った時に一部何かが必要って言っていた気がする…」

「このマークは何?」

「どうしよう不正だああああ!」

「どういうことなの栄生?」

待て、俺は聖徳太子じゃないから一変に答えられない。

てか誰か呼び捨てにしなかった?

「分かった!今日は特急について教えよう。じゃあみんな席について!」

と言うことで今日は特急のシステムを解説しようと思います。なお、地方鉄道は今回割愛します。

「本題に入る前に、特急の正式名称言える?」

「特別急行です。」

「紗夜さん正解です!よく知ってましたね。」

「この前伊豆に行った時、『特別急行スーパービュー踊り子』というの

に乗りました。あまり聞かない名前だったので、覚えていました。」
「いいですね伊豆！本題に戻ると、特急は特別急行、つまり急行のグレードアップという意味です。」

生徒たちはノートにメモリながら話を聞く。これも授業なので当選テストもあります。

「JRでは急行、特急には全て別料金必要と決まっています。彩さんのこのマークはグリーン車。簡単に言うと、他の車両よりも車内が少し豪華なんだ。逆にそのまま切符などで乗れる速達列車はほとんど快速と名乗っています。」

「じゃあ私たちは不正したまままだあ…。」

「嘘！どうしよう…。」

「香澄さん、たえさん落ち着いて。これはJRの決まりで、法律で決まっているわけじゃないんだ。」

「そ、そうなんですか？」

「言葉の意味的にはそっちが正解かもしれない。でも急行よりも停車駅が少ないという意味で使っている私鉄も多いんだ。香澄さん達が乗った京王も、その一つだよ。」

「そうなんだ！良かった…。」

「大手私鉄でそのままに乗れる特急が走ってる会社は京王、京成、京急、東急、名鉄、阪急、阪神、西鉄なんだ。使っているのはごく普通の通勤電車。これが私鉄のいい所でもあるんだ。」

「あれ？前のニュースで、成田空港に行くやつが早くなったって言ってたよ。なんか新幹線みたいでかっこよかったよ！」

「それは『スカイライナー』という特急だね。」

「それも… 無料なんですね。流石です…。」

おっと危ない危ない。

「隣子さん。実はそれは料金必要なんだ。」

「そう… なんですか？」

「数パターンの特急がある鉄道もある。京成、名鉄、南海だね。それに必ず料金が必要な車両もある。それが走ってるのはさつき挙げたのと、東武、西武、小田急、近鉄がある。」

「それじゃ何が必要か分からないよ〜!」

「大丈夫だよりみさん。別料金が必要な特急はほとんど名前と呼ばれている。例えば特急スカイライナーとかね。ただ近鉄だけは気をつけて。でも必要なものには必ず、『乗車券の他に特急券が必要です。』とアナウンスするんだ。まずは落ち着いて放送を聞こう。」

乗り換えアプリでも、『安料金』と選択すれば特急を回避してくれる。別料金払わず行きたい時は積極的に使っていこう!」

「これで概要は終わりだな。ここからは、少し変わった特急を紹介しよう!」

カバンからプリントを出す。ちなみにプリントは学校に行けばあるので助かる。どっち行くかは迷うけど。

「利用者のニーズに合わせた列車が登場している。まずは座れる通勤電車だ。」

「座れる?」

「通勤電車?」

「これは首都圏に多く見られる。西武、東武、京急、京王が取り組んでいる。見た目は普通電車と変わらない。しかし最新技術で、日中は横向き、料金を取る時は進行方向に椅子が変わるんだ。」

「…それって、ぼったくりじゃないの?」

「いい所に気づいたね蘭さん。でもぼったくりではないよ。都心では座席に座る確率が非常に低い。少しのお金を払えば座れるという利点を狙っているんだ。ただ利用の別れは鉄道会社で左右しているけど…」

「そして西では逆ぼったくりの列車がある。」

『逆ぼったくり!?!』

「ピックアップするのは西鉄、京阪、阪急。阪急は全車両共通だから今回は見送るね。」

(阪急にも『京とれいん』というのがありますが、そもそも普通車でも豪華なので、今回は割愛します。)

そして2つの似た列車の写真をホワイトボードに貼った。

「まずは西鉄の『水都』と『旅人』だ。なんとこんな豪華なのに普通に

乗れてしまう！」

今度は金と赤の列車の写真を貼る。

「そして京阪！二階建てを揃えての別料金不要！しかも京阪の特急はほとんどこのクオリティなんだ！」

「あはは。栄生先生宣伝しているみたい。」

「でもなんでそんなサービスがいいんだ？」

「関西はサービス合戦が激しい。大阪から京都も例外ではない。京阪はスピードでは勝てないため、車内を豪華にして利用者を掴んでいく。」

「でもこの電車は一部何かがあるって言ってた気が…」

「よく聞いていたね。最近京阪はプレミアムカーという車両を連結したんだ。これには別料金が必要なんだ。ただでさえ豪華なのに、数百円払うだけでグリーン車並の席を堪能出来る。京急でも同じサービスを始めたが、まだまだ改善が必要みたい。」

「これも新しいサービスなのかしら？」

「実はそうでも無い。1両だけの中間車は最近だが、このシステムは結構前からある。」

そして青い車両と赤い車両の写真を貼る。

「南海と名鉄。まずは南海。南海は特急『サザン』が唯一選べる特急。そのまま普通車に乗るか、確実に座れる座席指定に乗るかが選べる。」

「サコウ先生！座席指定は普通の通勤電車なんですか？」

「いや、ちゃんとした特急電車だよ。利用者に選択肢を与えるのも一つのサービス。まったりと座って行きたい人と、早く行きたいが安く行きたい人を同時に乗せれるのがメリットなんだ。」

「ていうことはデメリットもあるのかなあ？私は一番いいと思うけど…」

「実はそうはいかないんだ花音さん。特急サザンは指定者4両に普通車4両の同じ数で連結して運転している。同じ数だとムラが出てしまう。さらに8両が限界だから、これ以上増やせないんだ。」

「ふええくそうなんだ。」

「この課題をクリアしたのが名鉄。特別車2両の一般者4両の固定。」

更にラッシュでは一般車を2両増結で6対2の、完全に需要に合わせて車両を運行出来てる。」

「名鉄が最高の特急なんだろう。ああ… 儂い…」

「ところがどっこい。名鉄にも課題はある。実は簡単に車両を離せない為、日中は特急運用しか入れない。急行や普通で走ることもあるが、特別車は締切という初見殺しが待っている。」

実は名鉄が一番バリエーションが多い。ただ全て指定の電車は『ミュースカイ○○行き』と表記されるため、名前がない特急はそのままでも乗れると捉えていい。

先程行った近鉄は唯一特急に名前がないので注意して欲しい。あとの名前のない特急は基本別料金が必要な。

地方の鉄道はまた違って来るので、前々から乗ると分かっていたら事前に調べた方が、当日楽になる。

「それじゃ今日はここまで！何か質問ある人々」

特に質問したい人はいなかった。

「じゃあお疲れ様って一社さんからメールが来てるな。」

『看板付け終えたから見に来て。』

いつの間に工事してたんだ？まあいいや行こ。

「何コレ！」

チャラ〜ン。タンタンタンタン、タンタンタ〜ン…………… じゃねーよ。なんだよこの看板は！

そこに書かれていたものは…

『やいっのてつどうきょうしつ』

花女・羽丘公認』

「ねーねー！これ俺たちが書いたんだよ！」

「どうかな?」

突然双子みたいな子供に声を掛けられた。

「うんよく書けてるよ。ところで君たち誰かな?」

「あ、栄生先生!この子達は私の弟と妹。純と沙南です。」

「沙綾さん。でもなんで...?」

そこで一社さん御一行が合流する。

「いいじゃない減るもんないし。」

「いや、別にいいよ。この子達も一生懸命書いてくれたんだし。でも

「一ついいか?なんで公認だけしっかりしているんだ?」

「だってそこ重要じゃない。宣伝にもなるし。」

「ふざけんな! (声だけ迫真)」

6話 オリジナルのメロディを作ろう!

「本日は鉄道メロディについて解説しよう!」

「ここは『さごー』のてつどうきようしつ」

いつものガルパのメンバーを相手に授業をしています。今日は鉄道に關係する音楽について。

「実は歴史は外か中によつてかなり変わってくる。」

「どういう意味なの?」

「まああまりサさん落ち着いて。まずは古い方から。今から3曲流すから聞いて。」

そして持つてきたパソコンから音が流れる。

「これに聞き覚えはないかな?」

「これは大阪に行った時に使つた新幹線で聞いた事あるわね。」

「2曲目は仙台に行った時に聞きました!」

「最後は『あずさ』に乗つた時に聞いたような...」

「千聖さん、イヴさん、彩さん正解! パスパレはロケに行く時に乗るから記憶には強いかな?」

まずは『あずさ』のチャイム... JR東日本の4打点。これはほとんどのJR東日本の特急で聞ける。

そして東海道・山陽新幹線のチャイムは始発終着と途中駅で違う。さらに2種類あるから聴き比べてみよう。

「このように車両で流れる音楽、車両チャイムはかなり前からある。国鉄時代の定番として、電車は『鉄道唱歌』、気動車は『アルプスの牧場』、客車は『ハイケンスのセレナーデ』さらに地域によつては色々な音楽が入つていたんだ。はいここテストに出マース。」

ちなみに自分が一番好きなのは、北陸新幹線の『北陸ロマン』。元の曲がいいのと、アレンジで最高のチャイムが完全している。

「次は外の方。これは大きく分けて3種類。接近メロディ、発車メロディ、乗車促進メロディ。これも面白いことに、西と東で別れる。」

「大阪に住んでいる時、電車が来る前にめっちゃ音楽鳴つていたかも

」

「そう。西、特に関西圏では接近メロデイが豊富なんだ。逆に発車メロデイなどはあまり浸透してないイメージかな？」

関西の発車メロデイは最近増えてはいるものの、やはり接近メロデイの方がイメージが強い。

「そして関東は反対に発車メロデイが豊富。発車メロデイは昔からあるものだが、流行りだしたのはつい最近の話。」

「発車メロデイって発車する時に流れる音楽だよなあ？なんでそうしたんだ？」

「その質問を待っていたよ巴さん。元々ベルだったんだが、これを聞くと駆け込み乗車をしてしまう人がいる。それを阻止する為にメロデイにしたんだが、メロデイが浸透するとまた駆け込み乗車が増える。本来は駆け込み乗車防止のために作られたんだが、残念な事に効果がなくなっている。」

今は別の対策もとうとうとしているが、まあ効果は見込めないな。

「そして乗車促進メロデイも発車間に鳴るもの。これはあまり浸透してないかな？ちなみに発車メロデイと乗車促進メロデイの違いを分かる人いる？」

「えっと…どれも電車が発車する時に鳴るんですよ？」

「そうだよ。つぐみさん分かる？」

「いえ、わからないです。」

「他に分かる人いる？」

あちこちから「知ってる？」や「分からない」という声が聞こえる。知ってる人はいなさそうだな。

「答えは鳴っている場所。発車メロデイは駅からだね。」

「他に鳴らせるものなんてあるんですか？」

「じゃあ美咲さん。電車がいるホームの状況を考えて。一つはホーム。もう一つは何がある？」

「何って電車じゃ…あー！」

「そう。乗車促進メロデイは電車から鳴っているんだよ。最近はず外スピーカーというのを取り付けて、電車からも音楽を鳴らせるんだ

よ。」

このタイミングでこっそりゲストを呼ぶ。個人的にはあまり呼びたくないけどな。

「それぞれの長所、短所を言うよ。まず発車メロディだと、色んな音楽が作れる。一部会社は流せる時間も決められる。しかし、コストが高い。乗車促進メロディは、どんな駅でも音楽を流せる。ただし一種類しか流せない。」

その時ドアが開いた。

「やつと来たんか。」

「やつと… って連絡きたの1分前なんですけど!？」

「あれ?なんでまがりんがいるの?」

「みんなバンドでオリジナル曲を作っているって聞いたよ。今日は自分達の今日をアレンジしてみよう!曲、アプリの使い方よろしく!」
「OK任せて!今みんなの前にパソコンあるでしょ…!」

やはり私立は凄い。こんな所にも文明の機器を備えてくれる。曲を呼んだのは、音楽を作れるアプリを教えるため。

「じゃあ好きな音源で作ってみよう!ちなみに俺が作ったのはこれね。」

(なんか嫌な予感しかしない…)

予想は的中。あいつのパソコンから不適切な音源が流れた。

『デデドン!デデデドドドドン!』

(曲い… てめえ…)

「それでは作ってみよう。先生はちよつと廊下に出てるね。あ、曲先生も一緒に!」

「待って、笑顔が怖い!ちよつ… 腕痛いですけど…」

「我慢しろ。」

「いやややアッアッアッアッ… 助けて!死にたくないいいイイ!!!」

「ちやちやうるせえやつだな全く。」

「どういうつもりだ？」

さて静かな廊下。ただいま曲被告人を尋問中だ。

「いやあ好きな音楽って栄生先生が仰ったから…」

「だからって使っていていいものとダメなものがあるだろ！」

「いいじゃないか別に…」

「あの子達が絶望したらどうしてくれるんだ！」

「突っ込むところこそ!？」

『るんって来たあ!!』

今の声は日菜さん!?

「純粋な子が淫夢に興味持ちまっただじやないか！」

「いや、メロディ製作の方だろ。」

「まあいいや。とりあえず帰れ。」

曲が手を差し出してきた。

「なんやその手。」

「え? 給料…」

「ああ… 用意したけど減給処分だから後日渡すわ。」

「ふざけんな。いいよ職員室で漁ってくる！」

「残念く今はポツケの中にありまゝす。」

「畜生めえ!! ははいたたばーか!」 ↑聴き取り不能

「お待ちせ。みんなどう？」

「さー先生! 聴いて聴いて!」

「お、香澄さん。じゃあ聴いてみようかな？」

流れたのは一般的な電子音に、鉄筋みたいなベースが入っている。

まるで満天の星空の下にいる気分だ。

「これはなんて曲なの？」

「STARBEST〜ホシノコドウ〜です！」

「とてもいい曲だね。アレンジもバッチリだよ！」

「ありがとうございます！」

「どうやらオリジナルもクオリティ高いのは嘘ではないようだ。」

「栄生。私のも聴いてくれるかしら？」

「友希那さん。せめて先生を付けてくれるかな？」

友希那さんのパソコンからは、オーケストラ風の音楽が流れた。これは今でも燃え上がりそうなメロディだ。

「なるほど。オーケストラでやってみたのか。」

「やっぱりダメかしら？電子音じやマンネリ化して…」

「いや、実際にあるよ。近鉄特急が発車する時にもオーケストラアレンジだからね。九州新幹線もこんな感じだよ。」

駅から流れるメロディだから駅メロって言われる。音源の定義はどこにもない。

特に今の近鉄名古屋で聴ける『ドナウ川のさざ波』はオーケストラアレンジでいい。

「ねえ栄生！私のも聴いてくれるかしら？」

「ごころさんも先生って付けてくれないかなあ…」

ごころさんはイメージとは逆に、テンポが少々遅いメロディを作ったようだ。

「なるほど。マーチみたいな感じだね。」

「これは『えがおのオーケストラ』って言うのよ！今度ライブをやるから聴きにきて欲しいわ！」

「またライブやるの!？」

「待つてごころ！それ聞いてない…」

「美咲さんが知らない…って今決定したの？」

「ええ！私の家でやりましょう！」

「私の家でやりましょう!？」

「栄生先生…そのまま返さないでくれますか…」

「ごめん… そう言えば他のメンバーはどうなの？」

はぐみさんは… やることに賛成みたいだな。薫さんは安定の決めポーズ。花音さんは苦笑いしている。

「決定みたいだよ美咲さん。ドンマイ！」

「あはは… ま、慣れてますから。」

慣れちゃってるのかよ…

その後全員の所にまわっては、綺麗なメロディを聴かせてくれた。実際駅にあつたらいいのに… と思うものばかりだ。

そして本気でオリジナルも聴きたくなつた。恐らく事務所の力を使ってるアーティストよりもレベルが高い。

そして後日。曲には元々日当1万円から90%オフの封筒を渡した。

彼には半分にしたと言ったので、まあ大丈夫だろう。

おまけく栄生と曲が出ていったあとの教室く

栄生が怒ってる感じがしたわね。何かあつたのかしら？ あるならさっきの見本だけど…

「ねえ燐子。少しいいかしら？」

「はい… 为什么呢？」

「あなたはあのBGMは知ってるの？ 知ってるなら教えてちょうだい。」

「知ってますけど… 知らない方が…」

「そうなの？」

なんで知らない方がいいのかしら？

「私も知ってるよ。NFOで…」

「紗夜も？」

「おねーちゃんが知ってるならいいものなんだよね?」

「どういう理論よ。って… もう調べているし…」

「うわあなにこれ面白そう! るんって来たあ!!」

「面白くないわよ。あとたくさん調べるのはやめなさい。」

もしかして検索してはいけないみたいなのやっ?

「もしかして湊さん知らないのですか?」

「蘭… ドヤ顔で言える知識じゃないよ! 友希那も知らなくていいからね。」

リサはああ言うけど、美竹さんが知ってるのはしやくにさわるわね。

私も帰って調べようかしら? 絶望みたいな感じだったから… 『絶

望 BGM』でヒットするかしら?」

7話 海に行きたい

「海に行きたい!」

「いきなりのタイトル回収ですか…!」

夏休み。学校が長期休みだから、鉄道教室も休みだ。

夏休み期間も生徒たちが遊びに来たり、自習しに来たりするのでなるべく開放をしている。

それで訪れた香澄さんは勉強する訳でもなくお願いしに来たのだ。そのお願いが海へ行きたい。

「行きたければ行ってこればいいじゃないの?」

自分で言うのもあれだがごもつともだと思う。

行きたければ行けばいい。

もし先生の許可が必要なら分かるが、それだったら理事長の一社さんか、生徒指導、または担任に聞くべきだと思うが…

「学校の許可が必要なの?」

「いや、いらナイよ。」

「なら行っておいで。」

「それでこの海水浴場に行きたいの。」

「そうなんだ。」

「行き方が分からないの。」

「ならば教えようか?」

「連れてって欲しい!」

「連れて… はあ!?俺が引率?」

「うん!」

うつわあキラキラしてるなその笑顔…

でも教え子と海はかなりまずいと思いますよ。

「親御さんに頼めないの?」

「友達同士で行きたいの!親などはいらナイよ!」

「そのなどには先生例外なの!?!」

「だって案内役必要だし…!」

「はあ…分かったよ。」

「ほんとう？やったあ！」

結局許してしまうところが自分の甘いところなんだな。

「詳しい日程を後に教えてよ。」

「はいこれ。」

「俺の都合ガン無視だった…。」

そして持ち物には水着と書かれている。

俺も必要なの？

海行きの当日。

メンバーはポピパと俺。

都電の早稲田駅集合で、そこから路面電車に乗る。

荒川線は都心に似合わない路面電車だが、ほぼ新型。路面電車反対の社会だけど、この路線はしばらく安泰だろ。そもそも自動車反対の政府だから、路面電車はどちらかと言えば支持されるほうか。

そして東京メトロ2路線を乗り継ぎ、西船橋駅へ。JRに乗り換えで東浪見駅まで飛ばす。

この海岸は意外に綺麗だった。まあ汚ねえ東京湾の反対だから多少マシなのだろう。

夏休みだからそれほどの人で賑わっている。しかしめちやくちや混んでいると言われたらそうでもない。今は海水浴場ブームが去っているらしいのでそれもあるかもしれない。単純に知名度が低い可能性もあるけど。

俺はビーチパラソルを立て、シートに寝っ転がって睡眠体制に入る。

「先生！一緒に遊ばないの？」

「遊んでいる姿を見られる。これこそ大の問題なんだぞ！」

「え〜！じゃあ気が向いたら来てね！」

まあ永遠に行かないだろうな。しかし香澄さんらしくないな。し

つこく誘われると思ったんだが……まあいつか（股尾前科）

遠くに聞こえる香澄さん達の声を感じながら目を瞑る。日光を遮っているので特別暑くない。さらに砂浜のベッドが暖かくて気持ちいい。

直ぐに夢の国に行くことが出来た。

ああ……ミッ〇ーが手を振ってくれてる……

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

ここはネズミの国。今激怒したミッ〇ーに追いかけている。こっちは全力疾走であっちはパレード用の車に乗っている。

ちなみになんで怒らせたのかは心当たりがない。ネズミは「ハッ」と笑うだけで答えてくれない。

あ、もう轢かれる。俺ネズミの夢の国で命を落とすのか……

空には眩しい太陽が。ここは天国なのか？

いや、漣の音が聞こえている……。そうだ。海に来たんだっけ……顔を横に向けたら、水着姿の家族連れが見える。

さあ体起こそうか……。なんで動けないの？

「あ、栄生が起きた。」

「栄生先生おはよう」

「おはよう。ところでこれはどういう状況かな？」

やっと分かった。香澄さんとたえさんが砂で俺を埋めようとしていた。

「うくん……何となく？」

欲しい理由がたった4文字で片付けられる。

「ていうか真面目組！なぜ止めなかった？」

ニヤニヤしている残り3人にも問う。

「この2人じゃ止められないよ」と苦笑いの沙綾さん。

「でも気持ちよさそうに寝てたよ。」とほっこり顔のりみさん。

「いい掛け布団だっただろ。」と当たり前のように言う有咲さん。

気持ちよさそうに見えても夢は最悪でしたからね!? 有咲さんは
ツツコミ放棄しているし…

もうダメだ… おしまいだ!

「私お腹空いた!」

「じゃあご飯食べに行こっか?」

「ちよつと待…」

「早くしないと混むぞ。」

「私ハンバーグ食べたい!」

「ちよつ…」

「あるといいね。」

「ちよつとお前ら…」

教え子に捨てられた…

こんな虚しいことある?

「なんで栄生がここにいるの?」

「栄生さんが水着と言うことは誰かと遊びに来たんですか?」

結局いもむしみたいにクネクネしたらなんとか砂の布団から出れた。

そして海の家に行くと、何故かロゼリアのメンバーがいる。

「ポピパの奴らに半ば強制的に案内をしたんだよ。そういう君たちは
?」

「私たちは近くにコテージ借りて合宿をしているわ。」

「なるほどね。それでなぜ海に?」

「今井さんが海に行こうと言ってきて… 要するに息抜きというやつ

です。」

「ロゼリアも息抜きするんだ〜ところでその山盛りポテトはみんなで食べるの?」

紗夜さんが持っているトレーにはLサイズ5個分のポテトがあった。

「これは私の分ですが?」

「嘘やん1人で食べるの…凄っ!」

いくら好きでもこの量を一気に食べるのはちよつと…

「みなさん〜ビーチバレーやりましょう!」

あいつはあいつで食ったばかりなのによく動けるわ。

「え〜これよりポピパ対ロゼリアの試合を行います。」

俺は審判が座るめっちゃ高い椅子に座りながらジャッジをする。

有咲さんと燐子さんが見守り、他のメンバーは戦う。

紗夜さんだけは水着じゃないんだな…

それにしてもここ気持ちいいな。潮風が涼しい。あ、これ寝るやつだ。おやすみ〜

気づいたら空はオレンジだった。どなたかのスパイクを食らって目を覚ました。

彼女達からの話によると、あこさんが負傷?をして燐子さんと交代。そして紗夜さんは結局水着に着替えた。

そして試合は熱中していき、ついにどっちが勝っているか分からない程まで。そして審判の存在を思い出して椅子を見たら爆睡している自分がいたと。

寝る自分が悪いけどちよつと酷くないか？

「そろそろ帰ろつか？」

「うん！ギター取りにいかないよ。」

「そつだな。じゃあ海の家に……つてはあ!?ギター!？」

「あれ？知らなかったの？私たち持って来てたよ。」

「いつも背負っているの見てるから全然気にしてなかった……」

「というか海にギター持ってくるか普通？」

「そして海の家のおっちゃんが出てきた。」

「お嬢ちゃん達！曲弾いていかない？ドラムだけはまだ届いていないけどな……」

「何言い出すんだこのおっさん。」

「この子達がやるわけ……」

「いいんですか？やったあ！」

「あつたわ……」

「栄生先生。やっていいですか？」

「まあ好きなように。時間もまだまだあるしな。」

「でも沙綾さんはどうするの？」

「私も歌おうかな？」

「おつとデュエット誕生ですか！」

「曲は『8月のif』そういうえばオリジナルを聴くの初めてだな。」

「最初はキーボードのイントロで始まる。」

「2人のハーモニーは爽やかな夏にピッタリだった。」

「正直ポピパは弾ける感じの曲ばかりだと思った。こういう感じも歌うんだ……」

「そして気がつけばギャラリーが増えている。こんな素晴らしい曲を披露してくれるバンドがいたら、ついつい足が止まってしまうわな。」

「私も行きましょう。いいフレーズが思いついたわ。」

「フレーズ……新曲でも考えていたのか？」

「ええ……なかなかいいのが思いつかなくて、それで息抜きで海に来たの。」

地味に散らばっていたパズルのピースが揃った。なんで音楽ガチ勢のロゼリアが海に来たのかが分かった。

「それで息抜きは成功みたいだな。」

「時間が無いわ。じゃあまた学校で。」

「ああ… 気をつけて。」

そしてミニライブは無事終了した。

その後の帰り道に「ポピパ弾丸ツアー！」と、ちよつと何言ってるかなこの子と思いつながら帰るのであった。

弾丸ツアーの案内役も依頼されたので、丁重に断らせていただきました。

8話 江ノ電で鉢合わせること

「「「あー」「」」」

「あれ？」

世間は狭いとよく言う。誰だろうね、最初に言った奴は。最近にしても大昔にしてもそれが続いているからそいつを褒めてやりたい。

事実目の前に知っている幼馴染み五人組。アフターグロウがいる。

そして現在地は江ノ島。江ノ島は神奈川県にある小さな島。水族館や展望台がある観光地だ。

※ゲームシナリオでは井ノ島ですが、当作品は現実に沿っているため、江ノ島と表記します。

栄生 side

「江ノ島行きてえ…。」

「いや行きやいいやん。」

「じゃあ行く。」

「決断早っ！」

学校も休みならば当然俺も休み。

暇だから曲スタッフのところに遊びに来ている。

「なんなら俺も同行させてよ。」

「ただの観光違うぞ？江ノ電メインの小さな旅だよ。」

「俺も鉄道好きってことを忘れるなよ。」

「いや初知り。」

そういえば自分の視聴者だったなこいつ。リスナーをこいつ呼ばりするのはよくないけど、曲ならいいか。

「撮影とかもあるからなく来週の土曜日ぐらいしか空いてないな。」

「その日仕事じゃねーか！」

「いや〜残念だったなく。俺1人で行ってくるよ。ホント残念♪」

「チツクショー！じゃあ土産買ってこいよ！」

説明しよう！江ノ島電鉄… 通称『江ノ島』は藤沢と鎌倉を結ぶ小さな鉄道会社だ。

特徴なのは緑とクリーム色の電車。普通の電車よりも短め。

しかし1時間に6本も走ってくれるので、鎌倉や江ノ島観光の時は気軽に使える。

もし乗るならば一日乗車券の方がお得だぞ。

そして江ノ電には沢山の見どころがある。まずは種類の豊富。都心では形式の統一化を図っているが、江ノ電は距離が短い割には何種類もある。鉄道ファンも見逃せないスポットなのだ！

「さて、最初は観光だな。」

鎌倉駅からは2000形というやつ。これは運転席の窓が大きいのが特徴。前面展望がしやすい電車だ。

そして最初の目的地は長谷駅。長谷寺の参拝と昼食を食べるためだ。

アフターグロウ side

「このパンケーキ美味しそ〜。写真写真と… って蘭に巴、モカはもう食べてる〜」

「だって早く食べたいし〜」

「クシュン！… ていうか寒い…」

詳しくはイベントストーリー見てね。

栄生 side

鎌倉の名物に『しらす丼』がある。シンプルだが、特性のタレをかけると美味しい。

そして次に向かうのは腰越駅。

江ノ電はギリギリを通る。道路と平行する所には柵がない。さら

に手を伸ばせば家に触れるぐらいの至近距離だ。

ちなみに乗っているのは10形。江ノ電としては異端児の青、白、黄色に塗られた電車。

『次は、腰越です。後ろの1両はドアが開きません。』

江ノ電名物の腰越ドアカットです。藤沢行きは後ろ、鎌倉は前の車両はドアが開かないので気をつけて！

そして腰越から江ノ島間は共用区間。いくら小さいとはいえ、普通の電車だ。人と車の間を縫う江ノ電の威圧感は凄い（小並感）

「このカーブエモすぎいいー！この電車の表情あゝいいっすねゝゝ」

この区間で数時間撮影をしました。

アフターグロウ side

「これどうすんの… ずぶ濡れじゃん…」

「ご、ごめんね… 私が前に行こうって言ったから…」

「せっかく館内で暖まったのにまた寒くなっちゃったゝ」

数十分後…

「モカ… なんであたしタコなの？」

詳しくはイベ（ry

栄生 side

「食べ歩きは最高だな！そろそろ日の入りの時間だな。例の場所に行こか。」

アフターグロウ side

「たこせんでかいな！」

「巴ゝ写真撮ってゝ」

「それより場所はどこだろうね… あれは…」

栄生 side

「えーつと… 江ノ島駅はあっちだったな。ん？あの独特な髪色五人組は…」

両side

「「「あ！」「」」」

「あれ？」

そして今に至る。

「栄生先生こんにちは！先生も江ノ島に？」

「江ノ島は魅力あるところだからねえ… 特に江ノ電とか江ノ電とか…」

「江ノ電しかないじゃん…」

「アフターグロウはなんで江ノ島に？」

「実はこの景色を見たくて…」

巴さんが差し出した写真は、江ノ島がシルエットの夕焼けの写真だった。

「いいね。俺もついていっていいかい？」

「え〜どーせ校外学習が始まるでしょ〜？」

「まあそうだな。でもいいかな… 俺その場所知ってるけど…」

「ホントか！ぜひ一緒に来てください！」

「いいよ。もともと行く場所でもあったし。」

「…………… はあ… 授業が始まる。」

江ノ島からは300形。今走ってるやつでは最古参。古いと言ってもそのあたりに走ってる古いの桁が違うから。

だって床が木なんだぜ。そんな電車なんて全国でも片手で数えられるぐらいだと思うよ。

そしてもちろん生徒さんが来てくれたので特別授業を始める。

と言っても、目的地はすぐなのでそんなみっちりした内容はやってない。

約4分ぐらいで着いたのは「鎌倉高校前」

「ここで降りるよ。」

「よしみんな！ここから下を向いて歩くよ！」

ひまりさんが提案する。確かにその方が感動するよな。

「段差あるから気をつけろよ。じゃあ俺は別のところに行くから、またホームで。」

「は〜い。」

栄生 side

アフターグロウのメンバーはそのまま階段を降りて砂浜へ。

俺は少し鎌倉方面へ歩いた。

そして目的地の場所に着いたら撮影タイム。最近はずわっている場所だが、日が落ちているからか、自分以外誰もいなかった。そして納得のいく写真を撮るまでそこにいた。

両 side

ホームに着いたのと同時に彼女たちも来た。

「どう？いい写真撮れた？」

「はい！バッチリです！夕焼けも綺麗でしたあ。」

「俺もいい写真も撮れたし満足だよ。」

「栄生先生の写真見せてください！」

「いいよ〜はい、どうぞ。」

『うわ〜』

撮影場所は坂の上の方。見下ろす形に見える海に、赤い空。そしてシルエットになった電車が通っている写真だ。

「とてもキレイ〜」

「江ノ電に乗りに来たらここは外せない場所。最近結婚アルバムの写真を撮りに来るぐらいの人気があるんだ。」

「あれ〜この場所モカちゃん見たことありますな〜。」

「何言ってるの？今日初めて来たんじゃない〜。」

「流石だねモカさん。もしかしてマンガやアニメ好き？」

「その通りです〜」

「実はここ…いや、この辺りはよくアニメの風景として描かれているんだ。聖地巡礼の王道の場所だね。」

「なるほどな！だから来たことなくても見たことはあると言うこと

か。」

「そういうことだ巴さん。」

そしてこの鎌倉高校前駅もパワースポット。駅のベンチから海が眺められる。

残念ながら、もう日は沈んでしまったので、目の前は暗い闇しか見れないけど…

「そろそろ帰りますか。」

「そうですね。もう夜になってしまいましたから。」

そういえば何か忘れてる気がする…。重要じゃないことつぽいからいいや。

曲 s i d e

「あいつ絶対お土産忘れてるな!」

9話 テストの時間じゃゴラア！第1弾

鉄道科目のテストは、定期テストとは別の期間にやる。理由は2つ。

1つは同じ期間にやると、一部の人達だけ科目が多くなってしまつてハンデを負つてしまうから。

2つ目は、花女と羽丘の日程を合わせる為だ。

そして先生になった身だから分かる。

(めっちゃ暇！そして眠い！)

もちろん黙々と取り組む生徒たち。違反行為なんてあるわけないし、質問もない。

早く時間が過ぎて欲しいと思うほど進まないのも、もう無関心で座るしかない。

読者の皆様も退屈なことでしょう。

そこで一部問題を見せます。もしわからなければ、前話も見ても大丈夫です！

何問分かったかは感想で教えて下さい！(感想稼ぎ)

Q 1、観光列車の1つで、車体が金箔で覆われており、文字通りのキラキラピカピカです。その列車の名前を答えよ。

Q 2、リゾートしらかみの一部列車である演奏会が行われる。その演奏会に使われる楽器は何？

Q 3、特急の正式名称を答えよ。

Q 4、最近では西武や京王で始めた新サービスの特急電車。そのキャッチフレーズは何？

Q 5、特急の定義は法律で決まれているか？

Q 6、国鉄時代の王道車内チャイム、電車、気動車、客車の全ての曲名を記せ。

Q 7、発車メロディと乗車促進メロディの違いを説明せよ。

答えは最後に書くよ。

大事なことなので2回言う。

めっちゃ暇!!!

教室を見渡せば、さまざま光景が繰り広げられる。

テストを見直しする人。顔をしかめながら回答する人。余裕そうな表情をしている人。寝てる人……寝てる!?

いくら寝るのは良くない。回答することに諦めたのか?

俺は席をたち、巡回の意味を込めて寝てる人のところに行く。ガラパをやってる方なら分かるが、絶賛爆睡中の方はモカさんだ。

そして彼女の解答欄を覗き込む。

(あれ!?全部解いてる?しかもほぼあっているし……)

『青葉さんは成績がいいから何も言えないのよ……』

そういえば吹上先生がそんなこと言っていたな……

そこからは早かった。テスト回収時にオルガ・イツカ化とした方が3名いらした。

フリージアの三部合唱歌いてえ……

俺の仕事は、採点して本校に結果を報告する。

「それじゃあテスト返すよ。」

1人ずつ名前を呼んで紙を渡す。ちなみに平均点は60ぐらい。狙い通りの結果だ。赤点は出ているけど……

「テストお疲れ!今回の満点は1人。日菜さん流石だね!」

「だって簡単だったんだもん♪」

じゃあなんでここに来たんだ。もしかして羽丘は抜き打ちでやったのかなあ?

「それにしてもその『るん♪』だっけ？・鉄道のごとはしなかったのに、一生懸命勉強したんだね。」

「え〜？だつてシュツとノート見ればすぐ覚えられるよ？・最近るん♪としてきたし〜！」

「どういう勉強方法なんだよそれ？・暗記が苦手な子に喧嘩売ってるぞ。」

「惜しくも満点じゃないが、高得点なのが、有咲さん、紗夜さん、モカさん、だったね。今回85点以上の子はこれからの授業は受けなくてもいいが、どうしますか？」

「この授業免除は任意なので、受けたければ受けてもいいし、受けなくてもいい。」

「ただ本校でもテストがあるため、また悪い点数を取ったら左遷される。」

「他の子もよく頑張ったよ！ただ危ないやつは何人かいたな。危ない越したやつも1人いるけど…。」

「私危なかった〜」

「か〜くんも？はぐみもギリギリだったよ…。」

「つぐみに教えてもらわなかったらやばかった…。」

「リサに聞いて正解だったわ…。」

「パスパレで勉強会しなかったらどうなつたのかしら…。」

「赤点は30点未満。ギリギリだった人は口々に安堵の声を上げる。香澄さんに至ってはちようど30点だったからね。」

「そして赤点だった人は1名。名前は言わないけど、当の本人は明らかに顔色が悪い。」

「他の人は気づいてないけど、先生は分かるからね？」

「赤点だった人は明後日の放課後補習ね。さてテストの復習をしよう。特に間違いが多かった問題からやろう。この問題は…。」

「今日も鉄道教室は順調です。これが第1弾なので、不定期ですがこれかもテストやります！覚悟してね？」

答え

Q 1、或る列車

Q 2、津軽三味線

Q 3、特別急行

Q 4、座れる通勤電車

Q 5、特にない。

別解・・・決まりは各会社で決められる。

Q 6、順番に、『鉄道唱歌』『アルプスの牧場』、『ハイケンスのセレナーデ』

Q 7、鳴らしている場所。発車メロデーは駅、乗降促進メロデーは電車

10話 サコデイ先生爆誕!

「ハーイ！ウエルカムトゥーマイスクールハウス！」
皆さんこんにちは！

アフターグロウというバンドでベースをやってる上原ひまりです。

私は今栄生先生の学校に来てます…… 1人で……

実は赤点取って補習なのです

だから休み返上で来たんですけど…… 私状況が掴めません。

目の前にいるのは多分栄生先生…… 何故か禿げてるけど。

服装から先生だと言ったことが把握出来る。

でも何故か喋ってくれないし、普段使わないものさしまで持っている。

そして教室の配置が違う。

「さあノートの問題を解いて！全問正解ならいいのをあげよう！逆に間違えたら私の怒りが増える。」

「え!?ノートってどれ？間違えたら怒りが増える。」

栄生先生はこれ以上喋ってくれない。まるでゲームのキャラクターみたいだよ

ノートの場所はすぐ分かったからいいけどさあ……

怒るのはわからないけど、つぐ達に教えて貰ったんだ！それぐらい余裕だよー。

ノートは一冊3問。全てテストに出てきた問題だった。

「おめでとうー!褒美にキラキラしたこれをあげるよ。」

「わくわく!先生ありがとうって120円!」

栄生先生のケチ!でも何冊か解けばもっというのをくれるのかな?
?

そして2冊目。ノートに7分の2の書かれていたから全部で21

問かな？余裕余裕！

『問題3 々〇々」・☆+」≡／一+☆』

……何コレ？

なんで日本語じゃないの？読めないよ先生！

もういいや適当に書こ！

そして採点欄には赤い罰が。そして聞こえるのはものさしを叩く音。

廊下に出ると、物凄い形相の栄生先生が迫ってきた。

(これ逃げないとヤバイやつだ。)

急いで出口に出ないと。

「なんで出口がないの〜!?!」

とにかく探すしかない。それともノートを解くのかな？

ペチツペチツペチツペチツ

先生が来た！逃げなきや…

「はあはあはあ…こ、こ、こここまで来れば…」

道中何故かチョコレートが落ちていて、貰ったお金でソーダを買った。

そして相変わらず3問目が解けないや。

「あ、吹上先生！」

遠くから私たちの担任でもある吹上先生の姿が！でも様子が変？

「レツツプレイ〜」

「先生!?今縄跳びをする暇なんて…それより助けて下さい！栄生先生が…」

吹上先生もこれ以上は喋らない。しかも問答無用で縄をまわして来る。

「これ跳ばないといけないやつ…?まづい！」

先生が来てしまった。もう跳んで逃げるしか…

「ワーオ！ザッツグレイ〜！」

ノルマ5回で良かった。縄跳びなんて小学生以来やってないから全然上手く飛べなかつたよ。間一髪で何を逃れた。

「この調子で全部解いちやおう！えいえいお〜！」

そういえば誰もいなかったんだ…

「よし4冊目終了！次は5冊目だレッツゴー！」

私は恐怖に支配されていることを忘れて次の教室に走り出す。

「廊下では走るな！」

「え!?!矢場さん！」

「補習です！何回言ったら分かるんですか？」

「私初めて注意させたんだけど…」

矢場さんは人差し指を立てながら部屋を去る。私は15秒の居残り。たかが15秒だけど、もう栄生先生がすぐそこに来ている。

「お腹すいたからチョコ食べちゃお！」

私は学校に落ちてたチョコレートを食べる。

「ん〜甘くて美味しい〜」

なんか疲労と体力が回復した気がする。

みwなwぎwつwてwきwたw w w

そして食堂室にもチョコレートがあつたので、こっそり持って行ったのはまた別の話。

「モカじゃん！どうしてこんなところにいるの？」というかでかくない

!？」

幼馴染の1人のモカがいるのはいいけど…なんで天井につくほどの巨体なの!？」

そして肝心なモカは…

「何か美味しいものよこせ〜じゃないと通させない〜」

「え!？お、美味しいもの!？そんなものは…」

パチンツパチンツ

(先生が来た!モカはこれ以上何も言わない…)

いつものモカなら、『ひーちゃん先生を怒らしちゃったの〜』って言うのに…

なんかおかしいよ!

「チョコ、チョコがあるから勘弁して〜」

「美味しいものは全て私のものだ〜」

「あれ!？モカが消えた!」

あれは幻覚だったのかな?でも考えている暇はない。早く逃げないと!

「はあ… はあ… やつと全て出来た…」

これで終わりなはず…

「おめでとう!7冊解けたね。あとやることは、今すぐ脱出することだな!!!」

先生!激おこ…ものさしの音も早くなっているし。

そして最後の教室を出たすぐに出口があった。

「ラッキー!すぐに出来るじゃん。」

しかし幻覚かダミーかは分からないが、出口は消えて視界も真っ赤に染まった。

「もう何でだよ〜!」

泣きそうだけどここは我慢…

「喉が乾いたからソーダ飲も。」

「けどソーダを開けたら何故か青い気体が出てどっかに行ってしまう。」

「そして空っぽになる。」

「何これ〜！水分補給が出来ないよ！」

「まずい！栄生先生がつてあれ？さっきの気体で前に進むことが出来ないみたい。」

「良かった。今のうちに出口を探そう！」

あれから何周したんだろう…

出口は見つかっては消える。もう体力も限界だよ…

「もう脱出出来ないのかな… 私何されるのかな… 何でもいいや… アハハ…」

意気消沈しかけた時。くつ下みたいな怪物が迫ってきた。

「いや、やめて！来ないで！」

くつ下は私の嘆きも無視して迫ってくる。

（食べられる…）

しかし目を開けても廊下だったのは変わりはない。

でも後ろには栄生先生！

「嘘、嘘だよ！足がもう…」

体力の限界か、足がもつれて転んでしまった。

栄生先生は一切の妥協を許さずに私に近づいてくる。

「いやあ!!やめて、来ないでええええええ
!!!!!!」

「ひまりさん！ひまりさん！」

こいつ補習でもグウグウと寝やがって。誰のせいで休みが消えた

んだと思っっているんだ！

「ひまりさん起きて！」

項垂れているようにも見える寝顔から、何かしない限り目を覚まさないかと悟った。

「しゃーない。このハリセンで叩くか。」

栄生選手。振りかぶって…叩いた！

『パシイイイイーン！』

あゝ頭の音ゝ

「ヒツ！さ、栄生先生！」

「何怯えているんだ？というか…」

「髪が生えている？」

「誰がハゲだ！」

恐らく怖い夢でも見てただろう。自分に怯えているのは、自分が何かしでかしたからなのかな？でも…

「良かったゝ夢だったんだ。」

「何が良かったゝなのかな？補習中に寝るとはいい度胸してんなゝ」

人の授業で寝て、人の顔を見て引いて何ほざいているんだが。

「あのゝ栄生先生？」

「どーせ休み返上には変わらなよな？」

「えーつとつまり…」

「補習5時間追加だああ!!!」

「いやああああ!!お助けをゝ」

「ダメです。」

「アゝアゝアゝアゝアゝアゝアゝアゝ…」

11話 青春を謳歌する方法

「なんかお得なきつぷはない?」

「いきなり言われてもなあ」

「何か安くなる方法があればいいのだけど。」

放課後、授業が終わった教室で友希那さん率いるロゼリアが尋ねてきた。

話を聞くと、冬休みに岡山の県北でライブがあるらしい。

県北と聞くと、あの親父しか出てこないのはここだけの話。

こんな遠い地域でやるライブなんて断ればいいのと言ったんだが、彼女達は無視したくても出来ないイベントだと言っていた。

この前頂点を目指すとか言っていたので、もしかしたらそのライブも重要なものなんだろう。

ただなんでそんなライブが岡山の県北なのかはみんな謎に思っている。

ちなみに交通費は自己負担らしい。

「金券ショップで格安きつぷが売っているから、今度案内しようか?」

「でも、何千円ぐらいしか変わりませんよね?やはり学生の私たちに新幹線だと高すぎます。」

「紗夜さんの言う通りだけどなあ…。でも高速バスだとケツが爆発するぞ。」

「お尻が爆発?どういうことかしら?」

「え?そのままの意味だよ。」

友希那さんが何かを考える仕草をする。

頭の中にお尻が燃えている様子が頭に浮かんでいると考えると…

あかん!笑けてくる。

「なんで栄生が笑うのよ。」

「だって冗談を真に受けるから…。面白くてって痛い痛い!」

肩にパンチをする友希那さん。頬を膨らませて可愛い顔をしているけど、結構痛いからな?」

「パワーあげつないな。さすが元プロレスグツホオ!」

「栄生先生大丈夫!？」

「…… 何とか…… ありがと…… あこちゃん……」 パタッ

「栄生先生が死んじゃった!」

「大袈裟よ。ところで爆発の意味はなんなの?」

「多分…… お尻が痛くなると…… いう意味かと……」

「それはいやわね。」

「まあ他に方法はあるけどね。」

「友希那のパンチを食らった割には復活早いね。」

「やっぱりえげつなかつたんだあのパンチ。アンパ○マンもびつくりだよ。」

「1人片道2410円で行く方法があるんだけどな。」

「往復でも5000円以下ですか!?!そんな都合のいいものなんてあるんですか?」

「あるんです!その名は青春18きっぷ!」

『青春18きっぷ!』

「そう!このきっぷは、長期休みと同じ時期に発売される、JR全線乗り放題のきっぷ!」

『おお』

テレビシヨップینگみたいな反応ありがとう!

「使い方は大きくわけて2種類。1人で5日間使うのもよし!5人で1日使うのもよし!値段は12050円!」

「みんなで出し合えば2410円で済むと。でも私たちはまだ18歳ではありませんよ!」

「このきっぷは誰でも使えます!ただし子供料金はないけどね。」

「いいね!友希那もどう思う?」

「私も賛成よ。こんな安く行けるのはお得よ。」

「異論ありません。」

「あこもさんせー!」

「私も…… いいと思います。」

「ふーん…… そんな簡単に決めていいんだ。」

「何よ。自分から言っておいて。」

もちろんこんな安いきつぷだからこそ ちゃんとしたルールも存在する。

「君たちはこのルールを聞いても結論は揺るがないかなあ？」

「ルール!?なんかかつこいいい！」

「なんなのそれは…。」

「色々あるけどね、一番代表的なのは、『特急料金、急行料金が発生する列車には乗れない。』」

『はあ!?!』

みんなポカーンとしている。

「もつと簡単に言うと、新幹線や特急電車には乗れないということ。」

さらにポカーンとする。

彼女達がフリーズしたのは、意味が分からないという訳ではない。むしろ意味が分かったから固まったんだろう。

「…えっと、つまり何が大丈夫なんですか？」

「そこら辺に走ってる普通や快速。」

「そもそもそんなんで行けるのですか!?!」

「そりゃ何回も乗り続けば。こう見えても線路は繋がっているんです…。」

「それで時間はどれぐらい掛かるのかしら？」

「さあ…? 半日は掛かる覚悟はいるんじゃない?」

『半日……』

やつぱりこんな反応だわな。そりゃ3000円かからない値段で新幹線に乗れるなら流通してるから。

『青春18きっぷ』は簡単に言えば、普通や快速にしか乗れない。乗ることが大好き人間向けの商品なのだ。

「ど、どうしよう〜」

「とりあえず話だけ聞いてみる? 決断はそこからでいいんじゃないかな?」

「そもそも半日掛かるのに、朝出発して岡山に着くのは厳しいと思いますけど。」

確かに普通の考えなら厳しいよね。普通なら。

「君たち 夜 行 列 車 って知ってるぅ〜?」

「文字通り、夜中に走る列車…。でも今の時代………… あるんですか?」

「臨時だけだね。『ムーンライトながら』って言って、東京から大垣まで走るのが。」

「月の光?なんかカッコイイ!!」

「青春18きっぷのルールは日付けが変わった瞬間から24時間後を1日としている。つまり、始発は関係無く、0時0分からスタートということ。東京からだとい付けを跨ぐから、別のきっぷで西の駅まで行き、そこからムーンライトながら乗れば早朝には東海地方を超えられる。」

「でも私たちじゃ怖いかも…。」

「確かに女子だけはオススメ出来ないね。」

「… 1つだけいいですか?」

「どうぞ紗夜さん。」

「夜行列車と言ったら、『ブルートレイン』のイメージが強いのですが、ニュースとかは寝台特急〇〇と書かれていた記憶があるのですが…。」

「ほう… よく知ってるね。」

「ならば、ムーンライトながらに乗るとルール違反になってしまうのでは?」

「なかなか鋭いね。でも、誰がムーンライトながらは特急だと言ったのかな?」

『え?』

「ムーンライトながらは立派な快速だよ?」

「快速って、中央線とかの電車だよね?あこたちそれで夜を明かすの〜?」

「あはは、違うよ。特急電車を使うんだけど、種別は快速での運転だよ。別料金いるけど、特急ほどじゃないんだ。」

「それはありなの?」

「きまりはないからね。それにムーンライトながらに限ったことじゃ

ない。」

特急電車を使う快速電車は全国津々浦々ある。多くの名前は「ホームライナー」という名前で走っている。

ニーズはこの前やった『座れる通勤電車』と似ている。

話は変わるが、別料金が必要な普通電車みたいな快速もある。一部だけが北海道の『快速エアポート』、四国の『快速マリンライナー』、全てなら東海の『快速みえ』がある。

そして乗り得の普通電車もある。ごく稀に特急を使った普通電車もある。もちろんそのまま乗れる。

「それでも往復1万以内なら絶対収まるよ。」

「一度、検討しても…いいかもですね。」

「ただムーンライトながらは人気だから早めに決めてね。」

「でも女子だけで乗るのは怖すぎます。」

「その時は誰か来て貰うしかないな。最悪俺でもいいけど。」

ここで言う怖がるから言わないが、ムーンライトながらは噂によると、あまり治安がよろしくないらしい。

さらにプライバシー関係ないため、女性のみ乗車は避けた方がいい。

「私からお父さんに頼んでみるわ。それよりも、乗る電車はあらかじめ決めた方がいいわよね?」

「そうだね。都心に住んでいると、『電車はすぐに来る。』というイメージが強いから予定決めなくてもいい。だけど地方はもちろん本数が少ないから、最初に決めた方が安心する。」

「OK!なら私がアプリで調べるね。」

「リサさん何しようとしてるの?」

「え?だって乗り換えアプリでササッと調べれるじゃん。先生が何言ってるの?」

「短距離ならね。長距離はアプリだと信用出来ないから、時刻表で調べるのが当たり前だよ。」

正直アプリは信用出来ない。

近場なら問題ないが、今回は東京から岡山。アプリでいつきに調べ

ると、どうしても誤りが生まれる。

例えば、そのまま乗ればいいものをわざわざ乗り換えろという感じの表示をする。逆に早めの電車に乗って、途中で乗り換えれば目的地に早く着くものが、少し待たされて直通する遅いやつに乗れと言う時がある。

つまりニーズに合わせた案内をしてくれないということ。

「反対に時刻表なら、一つ一つ調べるから間違いが生まれにくい。それに大きな駅の構造も書いてあるから、数分の乗り換えが大丈夫かも確認出来る。」

「うわーすごい細かい！あこ読めるかな？」

「これは市販だから、誰でも読めるよ。次の授業でやるか。」

「え・・・」

「四の五の言わないの。これも必要なことだから。」

「あら？ロゼリアも岡山に行くの？」

『「ごころ（さん）！（弦巻さん！）」』

「奇遇ね。ハロハピもその日岡山に遊び行く予定なの。一緒に行きましょー。」

「そうは言うけど、私たちのお財布事情じゃ厳しいんだよ」

「大丈夫よ！黒服さんに頼んで、リサ達のきつぷも用意するわ。」

「え・・・」

軽く引いた。嘘、めっちゃ引いた。

この後弦巻家が、「いつもお世話になっている。」という理由で新幹線の往復（グリーン車）のきつぷ代を出してくれることに。

ロゼリアの悩みが嘘のように解決してしまった。

「そういえば何しに岡山に行くの？」

「大きい遊園地があるからよ。栄生も一緒に行きましょー！」

「いいけど、そんな遊園地あったかなあ・・・？」

「確か岡山ドバ○ランドっていうところよ。」

いや隠せてないよー！

そもそも現実にはないからね？

ん？待てよ… 弦巻家は日本でも有数の財閥。お金はたくさんある。あつ…（察し）

ちなみに次の授業で時刻表について教えたら、ロゼリア以外からもブーイングが来たのは別の話。

12話 関西五大私鉄の旅（前半）

相変わらず肌を刺すような寒さに震える今日。我らは今名古屋駅にいます。ポピパの5人と。

なぜこのような状況になったのか？

それは香澄さんが、「鉄道旅して新しい曲を作りたい。」と言ったからだ。

なんで唐突にそんなこと言うのかと聞くと、どうやら新しいコンセプトを取り入れたいということ。じゃあ何があると考えたら旅をして歌詞を作るのがいいと結論が出たそうだ。

そして簡単な旅はないかと？

香澄さん自身は早く作りたい。そして長期休みはしばらくしないことで、日帰りで出来るもの。

そこで俺が考案したのが関西五大私鉄ツアー。文字通り私鉄五社の目玉電車を乗り通すというルートだ。

もちろん途中で寄る観光スポットはないです。そんなことやってら時間が無くなってしまふからね。

そのことを香澄さんに言うと、「じゃあ先生がガイドして！」と仰ったので同行することに。

他のメンバーはというと、「香澄と栄生先生が心配だから。」という可愛そうな答えが帰ってきた。

てかなんで俺も心配されてんの？

まあそんなことで朝早くから東京を出発して今新幹線の名古屋駅にいるというわけです。

「なあ先生。一ついいか？」

「どうした有咲さん？」

「いくらなんでも馬鹿にしすぎだろ！」

「いやいや、全くしてないよ。」

「でもここは名古屋だよな？関西五大私鉄ツアーはやめたんですか？」

「あくそういうこと。東から来る時は名古屋から乗った方が効率がいい。」

いんですよりみさん。」

「じゃあここからJR線に乗るのかな？」

※JR線とは本来新幹線をも含めた総称である。この場合は『在来線』というが、この名称が浸透していないため、ほとんどが新幹線とJR線と分ける。

「沙綾さん。私鉄で一番距離がある会社はどこか覚えている？」

「えーっと・・・近鉄でしたっけ？」

「正解！でも正直君たちは関東の私鉄よりもちよつと広いぐらいにしか思っていないんじゃない？」

「ピンと来ないなく。香澄は？」

「考えたこともない！」

「でも栄生。この先歩いて何があるの？JRの改札過ぎたよ。」

「じゃあたえさん。あれなんと書いてある？」

「近鉄名古屋駅？」

「嘘！なんでここで乗れるの？」

「近鉄はそこの鉄道の規模とは違う。この鉄道会社は2府3県を跨ぐ大きな会社だ！さていきなりメインディッシュをご堪能してください。だこう。」

近鉄名古屋駅はクシ型みたいなホームだ。そもそも近鉄の終点駅は、大阪難波を除く全てがこのような形となっている。

「うわーこの急行いっぱいだよ」

「今から何乗るのかなあ。」

「あーうさぎさんがいるー！」

「あれは志摩スペイン村のキャラクターだね。電車はもうすぐ来るはずだよ。」

近鉄名古屋駅の一番端の5番線に白い色の電車が入線してくる。

「なんかアヒルみたい！」

「でもカッコイイな」

「これぞ近鉄名阪特急の王様『アーバンライナー』俺もシユツとしてて好きなんだよな」

今回ついているのか、来たのはアーバンライナーnextこと21020系。アーバンライナーはplusとnextの2種類があり、nextの方が数が少ない。そしてデザインはnextの方がカッコイイ。

ただ内装は同じなので、あたりハズレはない。

「先生。何号車に乗るんですか？」

「1号車だよ。一番手間の車だね。」

1号車を選んだ理由はもちろんこれだ。

「ちよつと待て！こんな豪華でいいのか？」

「有咲さんどうした？」

「栄生先生。電車賃を払ってもらうことすら申し訳ないのに、贅沢なシートまで用意してもらったら頭が上がらなくなります！」

「そんなこと気にしなくても…」

「でもグリーン車みたいですよ！とても高いんじゃない？」

「これ？基本料金のプラス500円だけど。」

「……え？」

1号車はデラックスシートと呼ばれるグレードアップ車。

普通車…レギュラーシートとの違いは一目瞭然。シートが2×

1の配列。

そして高くみえるこの車両は運賃と特急料金プラス500円。低い課金で贅沢な時間を手に入れることが出来る。

たかが500円じゃ大した違いがないのではないか？そうでもないんだな。それは後に分かりますよ。

近鉄は車両以外にも見どころはある。

例えば中川短絡線や大手私鉄では珍しい秘境駅。大和八木駅の構造など。

そしてすれ違う電車は面白いものばかりだ。

本当は解説したい！したいけど…

俺は辺りを見渡す。

席は、進行方向から香澄さん、有咲さん、通路挟んで沙綾さん。向かい側はりみさん、たえさん、ワシ。

みんなで話が出来るようにしているけど… 自分を除いて全員爆睡。

香澄さんは有咲さんに抱きついており、有咲さんは苦しそうに寝ている。多分夢でもシンクロしているのだろう。

りみさんはなんかモグモグしているし、たえさんに至っては「オツちゃん」と寝言を言っている。

沙綾さんは普通に寝ているのだが、よだれが少し垂れているのは知っているぞ。

それほど快眠が出来るのがデラックスシートのいいところ。

単純に朝が早かったというのもあるが、ヘッドカバーはもふもふだし、足も少し余裕がある。そしてシートが少し大きいのでゆつくりとくつろげる方がいい。

こないいいものをプラス500円で出来るからもう普通のシートには座れなくなっちゃう。

結局5人は布施駅を通過したタイミングで次々と起きた。

電車は定時に大阪難波駅に到着。

「おはようみんな。よく寝れたかい？」

「おはようございます！バッチリ寝れました！」

「私は夢でも香澄に抱きつかれた…」

「そりや現実でもそうだったからな。」

「マジか…」

「関西久しぶり〜」

そういえばりみさんは関西出身だと言っていたな。

「次は何乗るの？うさぎみたいな電車？」

「それは難しいな…。今から阪神に乗って、尼崎に行くよ。」

「それにしても頻繁に電車に来るね…。」

大阪難波はあまり見かけない通過型ターミナル駅。通過型ターミナルのメリットは、幅広い方面に路線を伸ばせる。デメリットは、1つのホームに色んな方向に行くので分かりづらい。

「私だったら絶対迷っちゃう。」

「甘いな沙綾さん。上には上がいるってことを知っているかい？」

「これ以上があるんだ…。」

「レベルが高すぎるから君たちに教えるのはもつとあとだな。」

「ええ…。(困惑)」

そして大阪難波駅は阪神も乗り入れている。なので最長神戸三宮から奈良まで乗り換えなしで行ける。

そして近鉄と阪神の乗り入れに関して自分は、「利便性だけを重視した乗り入れ」と呼んでいる。

来たのは黄色い電車、9000系快速急行神戸三宮行き。

この電車に関しては特に変わったものがない。

阪神の本番は尼崎からだ。

「ね、特に何もなかった！」

「そう言っってやんな。9000系が泣く。」

「ここからどこに行くの？」

「ここからは本線に乗って、梅田に行くよ。」

「ちようど特急が来たよ。」

「特急なんか乗ったらホントに何も無いぞ。今から乗るのは普通電車だよ。」

『普通電車!?!』

「先生？普通電車に乗って何が面白いの？」

みんなの反応は当たり前前つと言えば当たり前。たえさんの言う通り、普通電車の方が面白いのはあまりない。

前までいい特急に乗って、快速急行で何もなかったのに普通電車に何かあるとは予想は出来ない。

「あつちに停まっているね。面倒だから特急の中を通るか。」
『…………』

乗るのは各駅停車梅田行き。車両は青と銀が特徴の5700系。

「これの何が面白いんだ？」

「パツと見た感じ東京の電車と変わらないけど…………」

「変わった景色があるんじゃない？」

特急が発車したらこの電車も後を追うように出発する。

「ちようどお客さんいないから、ちよつと何も持たずに立ってみてよ。」

電車は緩やかに加速すると、すぐ徐行速度で止める。これは側線から本線に合流するからだ。

そして合流するとすぐに再加速する。

再加速してから数秒後…………

『うわ〜』

ポピパのメンバーがコケそうになる。

「………… ったく運転荒いなく！」

「でも地下鉄やさくらトラムよりも強い衝撃だったよ〜」

「………… 加速が早い。」

「ほんとだ！めっちゃ早い！」

景色はもう自動車以上に早く流れている。

「栄生先生、これは？」

「これは阪神名物『ジェットカー』、日本一加速が早い電車だよ。そしてこの電車は『ジェットシルバー』、加速が早いのに、省エネで静かなんだ。」

阪神の各駅停車………… ジェットカーの加速は伊達じゃない。

なんでこんな爆速電車が生まれたのか？それは阪神電車のモツ

トーから来たんだ。

阪神電車は『待たずに乗れる電車』を意識している。その通りどの電車もあまり待たずに乗れる。

そして阪神電車は駅と駅の間が短い。そうなると各駅停車はすぐに走って停まったの繰り返し。全て各停ならいいが、ここに特急や急行を走らせると、各停の後ろが詰まってしまう。

各停を待避させる駅を作ればいいのだが、それには工事費とダイヤ（ダイヤとは列車の時間を組成した時刻表のこと）を作るのがひと手間かかる。

そこで走行距離を他の電車よりも短くすることで、差が生まれて詰まりにくくなる。そこで誕生したのがジェットカー。

「ジェットカーの凄さを知るには、速度計を見れば分かるよ。」

「ホントだ・・・グングン上がってく。」

もちろん特急に比べて所要時間はかなりかかる。

でも楽しいので、梅田なんてあつという間になってしまう。

「楽しかった〜」

「うん！この電車はうちのうさぎみたいで可愛かったし。」

「ごめんそれは分からないな・・・」

「それで次は何乗んの？」

「次は至福の味わいと白熱したバトルを楽しんで貰おう。その前にご飯食べよっか？」

「やった〜」

関西五大私鉄の旅は後半へ続く。

13話 関西五大私鉄の旅（後半）

梅田でご飯を食べた俺たちは次の鉄道へ乗る。

「次は何に乗るの？」

「次は阪急で京都に行こう！」

阪急梅田駅は私鉄最大のターミナル駅。扇みたいに広がるホームは圧巻だ。

広くて迷いやすいと思いがちだが、方面によって完全に別れているので落ち着いて行動すれば問題ない。

「ふわ〜チョコみたいで美味しそう〜」

「りみさん食べちゃダメだからね？」

「え？」

「え？」

マジで食べようとしたのかこの娘。

「なんか高級感溢れる感じがするね。」

「分かる〜なんか私たち特別な感じがするよね〜」

「栄生先生。一応聞くけど、追加料金は？」

「要りません。」

「だよな...」

乗るのは特急河原町行き。電車は9200系だ。この電車はクロスシート... 進行方向に向いているシートなので長距離は助かる。

「凄い！中も落ち着いている...」

「ちなみに阪急はどの電車もこんな感じだよ。」

間もなく発車時刻になり、綺麗な発車メロディを耳にして出発する。

さて阪急名物はここからだ。

「有咲見て！電車が競走してる！」

「競走なんてそんなこと... あった。」

「これぞ梅田駅三本同時発車！京都線の場合、特急に乗ればほとんど競走を堪能することが出来ます！」

2本だと結構見掛ける。だけど3本はそんなじゃないんじゃないか

な？

特に同じ会社で、なおかつ必然的にだと。

「頑張れこの電車！」

「おいおい応援しているよ…。」

「でも応援したい気持ち分かるかも。」

「私もだよく頑張れ真ん中の電車！」

「おたえちゃんはなんで真ん中なの？」

一番奥から神戸線特急新開地行き。真ん中は宝塚線急行宝塚行き。

競走は次の十三までだが、この数分感は興奮する。

勝敗はどうなんだろう？

十三を出てからは特に変わった景色はなく、ただ目的地まで飛ばしているだけだった。

「先生！私たちはどこまで乗るんですか？」

「終点の河原町まで。本当は四条で降りて、地下鉄乗り換えた方が便利だけど、せっかく京都に来たんだ。歩いて次の電車に乗ろうか。ついでに甘味処があつたら寄り道してもいいしね。」

「甘いもの!?!やったく！」

京都内にある駅は、どれも風情ある駅舎だと思いがちだが、ほとんどが地下にあるのでそこら辺の駅と全然変わらない。唯一入り口だけが変わってるぐらいだ。

この後は京阪に乗るために祇園四条駅に向かっているのだが、途中に甘味処でお茶をしてから向かった。

トークに盛り上がっていると、意外にも時間が過ぎてしまい、鴨川から見た空は少しオレンジ色に染まっていた。

そしてここは祇園四条駅。

「そういうえば京阪の特急は凄いいんだっけ？」

「さすがりみさん！京阪は豪華なおかつ無料だからね。」

反対ホームには青と白の電車がいる。この電車は出町柳行き。

「確かに阪急みたいな感じだな。」

「でもそんな変わらなくない？」

「まあ確かにあの電車は平凡というわけじゃ無いんだけどね。でもそれだけでべた褒めするとも？」

「てことは・・・まさか！」

ちょうど特急淀屋橋行きの電車が来た。先程の電車とは違い、赤と黄色に金の線が入ったものだ。

「なんか料金必要みたいな感じだね。」

「よし乗るよ！」

『えく乗っていいの!?!』

「ちなみに上と下どっちがいい？」

「上の方が景色見やすいから上で！」

「了解！じゃあ行こうか。」

扉入ってすぐに階段を上がる。

「待ってくれ。この前京阪に1両別の料金が必要と言ってなかったか？グリーン車みたいに二階車両がそうなんじゃ・・・」

「あ、京阪のプレミアムカーは普通の車両の一部だから、ここは関係ないよ？」

「どうなってるんだこの鉄道・・・」

「変態だ・・・」

京阪の特急電車の一部には二階建て車両を連結している。この車両をダブルデッカーと呼んでいるのだが、ダブルデッカーをそのまま運賃だけで乗れるのはここだけだと思う。

彼女たちは軽く引いているが、確かにサービスが過ぎる。

京阪の特急は大きく分けて2種類。先程の青い電車もあるので、二階建てを堪能したい時は、発車案内板に2扉と書かれているか確かめよう。

「うわく高い！」

「どう？いい曲は作れそう？」

「とてもいいフレーズが浮かびました。ありがとうございます〜」

「私もいい歌詞書けそうです！」

「そう言って貰って嬉しいよ。だけどあと1つあるからな。まだまだ

終わりじゃないから。」

淀屋橋に着いて、地下鉄御堂筋線に乗って難波に戻る。

つい最近『大阪メトロ』と民営化した。つまり立派な私鉄なのだが、私鉄⇨地下鉄の概念は難しく、やはりどんな形だろうが、地下鉄は地下鉄である。

東京メトロも地下鉄のイメージが強いが、あれも立派な民営会社なのだ。

そして御堂筋線は大阪で一番混む地下鉄ということもあり、長い長い10両で運転している。

「1つ目は近鉄、2つ目は阪神、3つ目は阪急、4つ目は京阪。数的にはまた新しいものに乗ると言うことですね。」

「そう。最後は南海に乗って関西空港に行こう。そして飛行機で東京に帰るって感じ。お土産は関西でいいよね?」

「空港?てことはアーバンライナーみたいな特急に乗るのかなあ?」

「察しがいいね。一言で言うところ『ごっつい特急』だね。」

「なんだそのフレーズ...」

南海難波駅も阪急梅田駅と似た形。こちらは2方面に別れていて、和歌山、関西方面と、高野山方面。阪急梅田よりは簡単だ。

「さあさあ最後を締めくくるのは、南海ご自慢の特急『ラピート』。驚く外見をよく目に焼き付けて下さい!」

「と言ってるけどまだ来てないぞ。」

「そりゃさつき出発したばかりだし。」

「おいこら。」

「でもゆっくり出来るでしょ?ほら、他にも色々な電車がいるから良かったら解説しようか?」

関西の面白い特急は近鉄と南海がある。

「先生、あの青くてイケメンの電車は?」

「あれは特急『サザン』。和歌山に行く特急で、この前やった特急の制度で、一部指定のやつがあるって覚えてる？その代表列車の1つだよ。」

「あのずんぐりむっくりの赤いやつは？」

「あれは特急『こうや』。高野山に行く時は便利なんだ。今の時代では珍しいズームカーと呼ばれている形だね。」

と南海の特急はこんな感じ。

近鉄は、伊勢志摩に行く『伊勢志摩ライナー』、豪華よりの『しまかぜ』。名阪特急の新しいのに『ひのと』、元祖二階建て電車の『ビスタカー』などバリエイティ豊富だ。駅に入場するだけでも色んな特急が撮影出来る。

さて本ちゃんの『ラピート』の到着だ。

『ごっつ!!』

来たのは仮面を被った青いヒーロー…。ではなく、関西空港行き特急『ラピート』。

表現通り顔は仮面みたいで、全体に濃い青で塗られている。

これが南海の看板列車『ラピート』。ちなみに『ラピート』はドイツ語で『速い』という意味らしいが、正直速いより強いと言った方が似合う。

現に線路上にあるもの全て粉碎しそうなオーラを放っている。

「中は思ったよりゆったりしているね〜」

「ホントだ…。ロボットアニメに出てくる操縦席みたいなイメージしていた。」

「まあ仮にも空港専用特急だからね。外見はアレだけど…」

少し話を変えるが、関西空港と成田空港には2つの会社が入り入れており、それぞれ専用の特急がある。

それぞれの目的によって利用用途が変わってくる。

関西空港では南海の『ラピート』とJRの『はるか』。ラピートは安いお金で乗れることと、大阪の繁華街に直接行ける。はるかは京都まで乗り換えなしで行ける。

成田空港は京成『スカイライナー』とJRの『成田エクスプレス』。

スカイライナーは速達と低運賃。成田エクスプレスは多方面から乗れるという感じでそれぞれ合った乗り方が出来る。

一行は大阪の夜景を見ながら海を渡り、終点の関西空港へと到着した。

関西空港駅は近未来なデザインで、めっちゃくちゃ広い。

「さてこれでツアーは終了だ！どうだったかな？」

「すごく楽しかったです！歌詞が次々出てきて困っちゃうぐらい…」「正直授業で聞いているだけだどつまんねって感じだけど、いざ本場に行くと結構面白いな。これが百聞は一見にしかずってやつか？」

「一日で色んな電車に乗れるなんて凄いよ。関西出身でも驚くこといっぱいだったし！」

「アーバンライナーは気持ち良かったな。また面白い電車も教えてね！」

「あはは！沙綾さんはよだ r…」「言わないで！」あ、はい…」

「次はうさぎさんみたいな電車も紹介してね！約束だよ！」

「う、うさぎの電車？まあ頑張って探してみるよ…」

みんなの顔をみれば誰もが輝いている。改めてこの子達に出会えて良かった、教えることが出来て良かったと思えた。

そして気分がよくなった俺はあるものをプレゼントしようと思ふん…提案した。

「じゃあ次の授業までに、今日乗った電車のうち一つを選んで、レポート用紙一枚に概要や感想を書いて出してね。」

「先生…それってつまり…」

「レポート提出の宿題です。」

『え〜！』

「先生酷いよ。ここはどうか…ね？」

「駄目です。」

「先生の意地悪！体罰めー！」

ちよつと体罰は理不尽な！てか暴力を振るった覚えなし…

まあ宿題を出すのは先生だし… 多少はね？

「おっと…そろそろフライトの時間だ。急がなきゃ！」
「先生待ってよ早い〜」
こうしてポピパとの関西五大私鉄の旅は終了した。

14話

結成！発案者と被害者と参入者と訪問者

ライブハウス『サークル』にはもちろん多数のバンドが出入りしている。

そして代表となっているバンドがポピパなどにあたる。

そして新しいバンドがまた誕生しようとしていた。

「てことでどうよ？」

「いいんじゃないやれば？」

「他人事かよ……」

スタッフであるはずの曲がメンバーを集めている。

彼曰く、スタッフでもバンド組んでも問題ないらしい。

「お前もやるんだよ栄生！」

「いやいや。勝手に巻き込むんじゃない。」

そもそも俺は楽器何も出来ないからな。

「お前はボーカルという武器があるんじゃないか？」

「こいつ悟り妖怪か？」

「この前シンシーズの代役でも評判が良かったやん。」

「まあ生徒から冷たい視線を貰ったんだが……」

「でもそれぐらいは通用すると言うことさ。」

まあやってみる価値はあるか。

「仮にボーカルやるとして、お前の担当は？」

「俺はギターが出来るから安心しろ！」

「それでもバンドとしては成り立たない。」

「今からメンバー集めるしかないな。」

と言っても簡単に集まるか？残りはベース、ドラム、キーボード。かなりキツイ楽器だ。

「おっす栄生くん！」

「あ、吹上先生と、鶴舞先生！」

今日は土曜日なので、先生達も休み。

「にしても久しぶりですね〜」

「何言ってるの？昨日もあったじゃん。」

「そつちの意味じゃないですよ吹上先生。出番の意味が…」

「そうだよ栄生くん！作者ったら私たちを入れる隙がないからって言うて…」

「これ以上のメタ発言はやめてくれませんか？」

「栄生くんが言い出したことなんじゃ…」

「そういえば吹上先生と鶴舞先生って仲よかったんだ。プライベートでも会っている程だし。」

「それより君はスタッフさん？」

「あ、そうですよ曲と言いますよ」

「こいつちやつかりしてんな。」

「私たちバンドのメンバー探してるんだけど、メンバー募集中のところない？」

「先生達は何が出来るんですか？」

「私はドラム！」

「ベースならいじってるから…」

意外だな。吹上先生はドラムで鶴舞先生はベースね…

ん？ドラムとベース!?

「ちようど俺たち募集してたんですよ！一緒にどうですか？」

「え？君たちと…？他には…」

「ないです。」

「ちなみに栄生くん達は何をやるの？」

「俺がボーカルで、こいつがギター。」

「そつか。栄生くん歌上手いもんね」

いや〜照れますな〜……………ちよつと待て。

なんで歌上手いの知ってんねん。

まさかこの前のライブ聞いていた？

「まあいいや。栄生くんもいるから大丈夫でしょ。恋華はいい？」

「あ、うん！私は賛成だよ。」

結構早いペースでメンバーが集まったな。

あとはキーボードかあ…

「キーボードぐらいすぐに見つかるさ。じゃあ俺仕事に戻るわ。」

「お疲れ様〜」

ちなみにここはサークル前。

曲も行っちゃまったし、吹上先生と鶴舞先生とバンドについて話しか。

「吹上先生と鶴舞先生はどんな曲調がいいんですか？」

「それなんだけどさ、バンドのメンバーだから堅苦しいのやめようよ。」

「と言うと？」

「仲間なのに壁が出来る感じ。だから名前呼びしない？」

確かに先生呼びだとビジネスパートナーになってしまおう。それじゃダメだよな。

「分かりました。改めてよろしくお願いします。ひなたさん！恋華さん！」

「よろしくね。学くん。」

曲は受け付けをしている。お客さんは男性が1人だけいた。

「えー!?あの上飯田さんですか!?!」

大声で人の名前呼ぶなよ…

「いつも作品楽しませてもらってますよ!」

作品って…もしかして小説家、ライトノベル作家の上飯田 雅さん?」

「ありがとうございます。あと僕の方が年下なので、変に気を使わなくても大丈夫ですよ。」

「ほんとに上飯田さん?」

「あなたは栄生さん!いつも動画観てますよ。」

「あ、ありがとうございます。あなたの『逃亡アイドルの辿り着く場所』の映画観ましたよ。」

「俺も『偏見バーサス』楽しみにしてます!」

この人は上飯田 雅さん。幅広いジャンルの小説を書いている方だ。

そして噂を聞いたひなたさんと恋華さんも来た。

「私は『君の色をもっと濃く』は感動したなあ…。あの切ないラスト

は… うう…」

「そういえば花女の現代文に『きさらぎゲートウェイ』が載っていたよ
うな。もしかしてその作者さん?」

上飯田さんが人気なのが改めて分かった。

ところでなんで大物がちっぽけなライブハウスに?」

「栄生。今失礼なこと考えてなかったか?」

「ああ、なんでこんなちっぽけなライブハウスに? ってね。」

「普通に言うなよ悲しい…」

「僕この辺に住んでいるんですよ。そして趣味でキーボードやってい
て… 防音施設が近くにないかなと思ったら時にこのライブハウス
を見つけたんです。」

へえ。キーボードねえ。

「どうしたんですか? そんな獲物を見つけたような目は?」

「上飯田さん! バンドに興味ない?」

「バンドですか! 面白そうですけどメンバーの日程と合わせられる自
信がないですからね。」

「よかったら俺たちと組まない?」

「楽しそうですね。ですけど…」

「予定なんて気にしないで。気楽にやろうよ!」

「ほんどですか!?! ならお願いしようかな…」

「うん! よろしくね!」

こうして新たなバンドが生まれた。

名前の共通点として、苗字が駅の名前から(曲は知らん)『Stat
ion Names』通称ステネムにした。

おまけく第1回ステネム会議

「てことでステネムの方向性を固めよう!」

「まあジャンルは一つに縛らなくていいんじゃない？」

「私はビジュアル系はちよつと・・・」

「私も。」「僕もです。」

「俺も嫌だから安心して。それじゃオリジナル曲はどうする？」

「作曲は任せろ！ 作詞は上飯田さんお願いしていい？」

「大丈夫ですよ！」

「さてライブなんだが・・・やっぱり対バンだろ！」

「いやいや・・・結成していきなりそれはないだろ。」

「私は教え子のロゼリアと張り合いたいなあ〜」

「依頼した瞬間に追い返されますよ。」

「私はポピパとがいいな〜」

「俺の歌声に合わないから却下です。」

「俺はシンシーズと・・・勝手にやってろ」え〜」

「なんで単独ライブの発想がないんだ・・・ どう思います上飯田さんっ

てどこ行った・・・」

（仕事の都合で抜けますね。）

「.....」

もうこのバンド辞めたい・・・

15話 分裂！ホーンにこだわる少女達！

「じゃあ次の授業は、ミュージックホーンについてやろうか。」

『ミュージックホーン？』

「列車の警笛って口で表すと『ブーン』だろ？」

「あの音…大きくて、ビツクリします。」

「そうそう。うるさいけど必要不可欠なものなんだ。それで不愉快を愉快にする為に生まれたのがミュージックホーン。」

「確かに音楽が流れたらワクワクします！」

「そういうこと。じゃあ話の続きは次回にしよう。各自どんなのがあるかちよつと調べてきてね。」

こうして今日も鉄道教室は終了となった。

そして次も平和な授業が出来る。自分はそう思っていた。

しかしこの考えは甘い。知識豊富な俺は、色々なものを知っているから問題ないと思っていた。

でも彼女達は初心者。調べて印象に残るものは数少ない。

この鉄道クソ野郎が出した軽めの宿題のせいで……………

教室では戦争が起きていた。

扉を開けるとそこは2つの軍に分かれていた。

「あ…………… どういう状況!？」

トップとなる人達を先頭に、お互い睨み合っている。

「なんでこれの良さが分からないんですか湊さん！」

「あなたこそ。これがミュージックホーンの頂点。音楽の理解がないのはあなたよ美竹さん。」

マジで何で対立してんのこれ？

状況を説明すると、東にロゼリア、ハロハピ、日菜さんと千聖さん。西にアフターグロウ、ポピパ、彩さんと麻弥さん。間にイヴさんがいる。

(パスパレが分裂してるけど大丈夫なの？)

とにかく中立っぽい所にいるイヴさんに話を聞くか。でも不幸なことに、イヴさんは教卓から一番遠いところにいる。彼女のところに行くには軍事境界線を通る必要がある。戦争に巻き込まれかねないぞ。

「では、イクサの始まりです！」

待って！勝手に始めないで！ていうかなんでほら貝があるの？

「いぎ、カイセン！」ブオオ〜

『オラアアア!!』

マジで始まったぞ…

「ちよつとストロープ!!!」

『あ、先生!』

「あ、先生…じゃねえよ。何があつたんだいったい?」

薄々思っているんだけど俺って存在感うすい?まあ戦(喧嘩)を止められたのはよかった。

「それで何で対立してたの?」

「先生がこの前出した宿題で…」

「宿題でなんで… ああ!そういうことね〜」

簡単に言えば、元祖と本家で対立してたのね。恐らく友希那さん側が元祖、蘭さん側が本家って感じかな?

「君たち、元祖と本家を好むのはいいが、まだ色んなミュージックホーンがあることをお忘れではないか?」

「まだまだあるの?」

「そりゃあるさ。じゃあ早速授業を始めようか。」

ミュージックホーン。またはMHと呼ばれるものを装備している鉄道会社は基本人気がある方だ。

まずは東京だと、JR東日本や京成が搭載している。

「でもなんでそんなに影がうすいんですか？」

「ひまりさん。ストリート過ぎですよ…。まあなぜって言われたら…。2つの音しかないから？」

「確かに…。すごくいいとは言い難いね。」

でも実際多くの特急電車に搭載されている。実は形式によっては違うメロディが流れる電車もある。

そして京成はスカイライナーが搭載している。スカイライナーはホーンと言うよりも、ファンファーレと言った方がしっくり来る。

「そしてJR西日本も普通電車で、特急電車の2つがある。個人的にはJR西日本が一番鳴りやすいと思っている。」

「なんでそう思うの？」

「それは鳴らし方さ。普通のMHは別のペダルがあるが、JR西日本のは警笛と一緒にペダルなんだ。そのペダルを軽く踏めばMHが強く踏めば、爆音の警笛も鳴る。」

「つまり、鳴らすところが義務付けられるところでは、100%聞けるということだね！」

そして地方鉄道にもある。代表であげると静岡鉄道がある。地方鉄道と同じメロディを使うのが多いが、静岡鉄道は独特のメロディを持っている。

「さらに、MHがマジの音楽の列車もある。」

「それって注意喚起になるんですか？」

「はつきり言っただけだね。でも、列車の目玉の一つだから問題ないんだよ。」

その列車は近鉄の『青の交響曲』や、JR四国の『四国まんなか千年ものがたり』がある。

「じゃあ本題の元祖と本家の説明をしようか。」

すると、さつきみだいに分裂し始める。

「待って待って。戦争しようとするな。ほら、席につけ！」

「栄生！早く湊さん達に、間違っていること教えてあげてください！」
「聞き捨てならないわね。栄生、美竹さん達にあの良さを教えてあげてちょうだい。」

なんでここまで燃えるのか、逆に不思議だな。

「まずはそれぞれ良さを聞くか。友希那さんはなんでいいと思ったの？」

「なんでって… 最初に作り、トップを譲らないところに惹かれたわ。」

「トップって、それがトップなわけじゃないでしょ！」

「蘭さんは後で聞くから黙ろうか。じゃあハロハピを代表してこころさん。」

「愉快でホームにいる人みんな笑顔になりそうなもの！」

「なるほどね。じゃあ千聖さんと日菜さんは？」

「なんか上品って感じがするからかしら？」

「そうそう！なんか走って鳴らす時はるんつとするから！」

ほお… つまり最初に聴いたからとか、何となくとかではないんだ。

「次は本家だな。おまたせ蘭さん。蘭さんはなんでこれがいいと思うの？」

「なんか本来の役目を果たしているというか… なんかしつくり来るんだよね。」

「あと蘭は曲名と一緒にだからってもあるでしょう」

えくせつかくいこと言ってくれたのに…

台無しだよそれ。

「じゃあポピパを代表して香澄さん。」

「うん！なんかメロディが長いし、色んな駅で聴けているのがいいと思っただ！誰でも愛されている感じもあつたかも…」

「なるほど。じゃあ彩さんと麻弥さんは？」

「色々な音源があつて、一番電子音がよかつたと思つたよ。」

「そうっスね！気になる機械もありましたし… フへへ。」

こつちもちゃんとした意見だ！

さて、読者の皆様は分かりましたか？元祖と本家の鉄道会社は？

答えは、元祖は小田急！本家は名鉄です！

「正直君たちがしつかりした理由を言えるとは思ってなかったよ。」

「失礼ですね。私たちだって、ちゃんとやれば出来ます。」

「あはは… そうだね。それじゃ解説していこうか。テストに出すからちゃんと取れよ。」

まずは小田急のMHから。小田急が元祖と言われているように、日本で最初のMHを搭載した。その電車が、初代3000形SEに付けられた。(時が経つと、過去に使われた数字を何回も使わなくてはならない会社もある。その場合、区別付けるために初代〇〇系とか2代目〇〇系とかで表記する時がある。)

そして名鉄のMH。名鉄は小田急SEが登場して数年後、7000系パノラマカーに搭載された。

ではなぜ後に登場した名鉄が本家と呼ばれているのか？実はそれぞれ大きな特徴があり、その特徴に秘密が隠されている。

そしてガルパのみんなの意見も的を射る発言をしているのだ。

「友希那さんの言う通り、小田急は最初に作られた。そしてこころさんはホームにいる人が笑顔になる。」

「それは名鉄も同じじゃないのか？」

「小田急は発車する時に鳴らすイメージが強いんだ。到着する時よりも、発車の方が聴いている人が多いからね。」

そして上品と思う理由。それは…

「小田急のSEは当時、豪華な内装として登場したんだ。音からそう聴こえるという理由もあるが、上品に聴こえるのはそういう理由があるかもしれないね。」

そして反対のパノラマカーは、いい内装なのに、追加料金なしで乗れた車両なんだ。

「先生！なんで名鉄の方が本家って言われているの？」

「それははぐみさん。MHを搭載している車両の数だよ。」

『車両の数？』

「そう。実は小田急のMH復活は最近の話なんだ。今はロマンスカー3種類にしかない。」

「という名鉄も今は4種類しかない。しかし数でいったら、小田急が約10本。名鉄は約30本なので、圧倒的名鉄が多い。」

「だから名鉄の方が聴ける確率が高いんだ。そして昔は特定の場所でも鳴らしていた。だから本家と言われるようになったんじゃないかな？」

「そして名鉄の登場したほとんどの特急車両に装備されていた。当然音源も時代によって変わってくるんだ。」

「実は電車から聴けるMHで、同じ音でも違う音源があるのは珍しいのだ。」

「最後にじっくりくる理由。それは鉄道マニア達で有名な歌詞なんだよ。」

「なんですかそれは？」

「鉄道関連のメロディに歌詞を当ててるんだよ。」

「ある意味凄いな。」

「じゃあ名鉄のMHの最初、蘭さんちよつと付けてみて。」

「え、いきなり…えーつと、どけよどけよ？」

「おー早速当てるとは…じゃあMH、もとい警笛の役割は？」

「ホームの人に注意喚起をするため……そっか。」

「そう。だからじっくり来るのでは？」

「なるほど！だから湊さん。名鉄のMHが一番なんですよ。小田急なんて古臭いですよ。」

「なんですって！原点を忘れているあなた達に語る資格はないわ。まあ庶民程度の音楽で楽しみなさい美竹さん。」

うつわあ…また荒れ始めたよ。

『イヴ（若宮さん）はどっち!?』

「えーつと… 私仕事があるので行きますねサコウ先生！」

「え、えつと、気をつけて…」

「逃げたわね…」

「じゃあ栄生に決めてもらおうか。」

「お、俺？」

「あなたはどっちが上だと思うの？」

「まあちゃんとした意見を言うことが大事だから…」

「答えて栄生！」

「この調子なら次の宿題も出せるね、うん！」

「はぐらかさないで早く！」

「どうしても答えなきやいけないの？」

『当たり前よ!』

「……………名鉄」ボソツ

この後元祖チームから総攻撃を喰らい、見事討ち取られてしまっ
た……………

「ちなみに曲名と一緒にって、それはアフターグロウの曲なのひまりさ
ん？」

「そうだよ！私たちの曲、『Scarlet Sky』があるんだよ。」

確かに親近感湧くなく

「ちなみに名鉄を意識したってことは…」

「ないです。」

ですよねー笑

16話　こなせる人こそ立派な使い手

【運転見合わせ】何時何分ごろ、山手線〇〇駅で人身事故が発生した影響により、山手線全線で運転を見合わせております。

「ふええ… どうしよう…」

「ちよつと！これから仕事があるんです。どうしてくれるんですか！？」

「え、お客様？それは困ります」

さてここは東京原宿。今日はロールアイスというものを食べに来ました。

実はこう見えて大の甘党男子です。え？気持ち悪い？

いいじゃないか別に！そもそもなんで辛い系男子はワイルドでかっこいいと言われ、苦い系男子はクールでかっこいいと言われるのに甘党は認められないの!？

男子だって、甘いのが好きになる権利はあります

「さて帰ろうか、ってあれ？山手線止まっちゃっている？」

しょうがない。早く帰って寝たいからここは…あの目立つ髪色は…

「千聖さんと花音さん？何してるのこんなところで。」

「あ、栄生先生！」

「ちよつと良かったわ。」

「千聖ちゃんとお茶をして今から帰ろうとしたけど…」

「山手線が止まっていて、千聖さんがお仕事あるから帰れずに困ったと。」

「凄いわね。その通りよ。」

「OK！なら今回は迂回ルートを教えよう。」

『ええ〜』

なんでそんな嫌な顔をするの？

「だって今後も使えって言うでしょ？」

「そりや役立つことだし……」

「千聖ちゃんは電車の乗り継ぎが苦手で、私は方向音痴だから意味ないかなって……」

ようそれで原宿に来れたな……

「そんなこと言ったら時間を無駄にしている人と同じだよ？ さあ行くよー」

そして俺たちは原宿の近くの地下鉄を乗り継いで帰路についた。

電車に乗っている時も特別ミニ授業を開く。

「まずは、本来乗る路線が止まってしまったら、近くの鉄道を探す。ネットの地図で簡単に見つかるよ。」

「でも、乗り換え駅がない場合はどうするのよ。」

「実は今回みたいに、乗り換え駅ではないが、歩いて行ける別の駅もロゴロしている。鉄道会社が多い地域なら尚更な。」

「それでも手段がなかったら？」

「そしたらバスかタクシーを使うか、電車が動くのを待つしかない。」
乗り換えアプリで迂回ルートを探すのもありだが、その場合歩いて

行ける駅の案内があまりないので、自らルートを作成した方が、抜ける可能性が高い。

「今回の事故で止まるのは大体1時間から2時間ぐらい。その時にも何か自分で出来ることがあるはずだからね。」

「そ、そうね。栄生先生がいて良かったわ。」

「なのに自分の無能さを認めないで、文句を言う輩もいる。目的地に行けないイライラを駅員さんにぶつけることしか出来ない人間なんて、社会人失格だよ。」

「……………」ギクッ

「?どうしたの千聖さん。」

「実はね千聖ちゃん……………」

「そういうこと。これからは気をつけようね。」

「はい。分かりました。」

「先生。1ついいですか？」

「どうしました花音さん。」

「今日は改札入る前だからよかったけど、もし乗っている時に止まっちゃったらどうすればいいの？」

「その時は、案内板や放送をよく聞こう。その時に行く振替輸送があるかを確認しよう。」

『振替輸送?』

「ある路線が長時間止まった時に、別の鉄道会社が止まった路線の客を代わりに運ぶことを振替輸送と言います。」

「普通の乗り換えとは違うの?」

「振替輸送を行っている時は、そのままの料金で乗れる。つまりA線の切符を持っていて、そのA線が止まったら隣に走っているB線にそのまま乗れると言うこと。」

「でも、そしたら代わりにしている路線はただで乗せちゃうことになるよ?」

「その時は、止まった会社が後から人数を計算し、その分の運賃を代わりにした会社に払う。」

「だけど、現代だからこそ気をつけなきゃいけないことがある。」

「振替輸送が適用される切符についてだ。」

「券売機で買った切符や、定期券は適用されるが、ICカードは適用されない。」

「これは、ICカードは入場の地点ではお金を払っていないからだ。」

「だからもし別の路線に乗り換えるなら、降りた駅で支払いをし、もちろん別の路線でもお金を払わなきゃいけない。」

「だからICカードの場合、急ぎではないならその場で待った方が、金銭的にはお得である。」

「振替輸送が行われるのは、基本競合区間があるところ。」

「いつもはライバルだけど、何かあったらお互いに助け合う。」

「その通り!だけど手配に時間がかかるから、すぐに振替輸送が始まるわけじゃないからそこは注意しよう。」

電車が遅延することは仕方のない事だ。

だからと言って文句やケチをつけてその場で踏みとどまるのは違う。

自分で解決方法を探したり、情報を確認してそのまま待つのがかっこいい人間なのではないだろうか？

社会も電車の遅延で遅れる人を仕方ないと認めるのも必要だろう。

「じゃあここまでだね。」

『ありがとうございます！』

「次の授業は、振替輸送が行われる区間と、歩いて行ける近い駅をやろう。じゃあ仕事頑張っつてね千聖さん。」

「はい！じゃあ行ってくるね。花音！栄生先生！」

「気をつけてね千聖ちゃん〜」

17話 テーマパークでもある鉄道要素

「本当に来ちゃったよ… 東京〇イズニーランド」

「すみません。せっかく休日でゆつくり出来るところを…」

「気にしないで美咲さん。多分これ逃げられない運命だから。」

お察しの通り、わたくし栄生 学とハロハピのメンバーは浦安にある某テーマパークに来ている。

もちろんハロハピが元々行く予定を、自分がプラスαって感じ。

そして俺はあまりこういう施設は好きじゃない。いつでも混むし、アトラクションに乗るのに何十分もいちいち並ぶの嫌だし、精神的に疲れる。

だけどこころさんが、「栄生も来たら楽しいわよ!」と言ってしまった為、黒服さんの威圧回避の為にノコノコ付いてきた。

「正直笑顔になれる自信がないよ…」

「だ、大丈夫ですか? できるだけ無理しないでくださいね?」

「ありがとう花音さん。出来れば絶叫系は断念して欲しいかな?」

「分かりました。こころちゃん達にも伝えておきますね。」

つくづく思うのが、なんでこんな常識人がハロハピにいるんだ?

演奏技術からもつと普通のかっこいいバンドに入れたと思うけど、なんか訳でもあるのだろう。

「ま、授業が出来るから結果オーライなんだけだな。」

「え… こんなどころでもやるんですか?」

「そうじゃなきゃこんなどころ来ないよ。」

自分が少しでも来る価値があると思う。鉄道がある。

大阪のあれと比べりゃこつちの方がまだマシなのだ。

「3人とも早くー! まずはあれに乗りたいわ!」

こころさんが指したのは1本に伸びてるコンクリートの柱。

「こころさん。これはホテルと明日行く海の方に乗るから後だよ。」

「残念ね。早く中に入りましょう。」

「先生。あの儂い柱はなんだい?」

別に憐くはないだろ。そういえば薫さんが質問は珍しい。

「あれはデイズニ○リゾートライン。モノレールだよ。多分もうすぐ来るから待っつ？」

「モノレール!? そ、そっか… 高いところ走るのか…」

「ん? 高いところ苦手?」

「いや、そんなこと!」

あるんですねー

でもこのモノレールはそう大して高いところには走らない。ビルの3階ぐらいの高さが平気ならよっぽど大丈夫。

「リゾートラインはアトラクションに見えて、実際はちゃんとした鉄道なんだ。だから決まり事もしつかり守らなきゃならないんだ。」

夢の国と夢の海を結ぶ鉄道がそこらのと会社と変わらないって聞くと、夢が壊れたように聞こえるかもしれない。

しかし安心して乗れると考えると十分鉄道会社の人も夢を与えてくれている。

「黄色のモノレールだ! はぐみ達にぴったりだね!」

たまたま見たモノレールは黄色だった。実はモノレールは全て違う色に塗られている。

同じ形式だから面白くないと思いがちだが、色が違うおかげでちよつとした楽しみが生まれる。

ちなみにモノレールには四つの駅があるのだが、全て違う雰囲気を出している。

そして何回も乗り降りする予定なら、フリー乗車券がいい。Suicaなども対応しているけどね…

「それで、みんなは何に乗りたい?」

「私はジェットコースターがいいわ!」

「人の話聞いてたかい？」

「ならスピー○マウンテンがいいよ！」

「援護すんじゃねー。」

「私は儂い乗り物を頼む。」

「夢の国にねーよそんな乗り物。廃遊園地か！」

「私はイツ○スモールワールドがいいなあ…。」

「実に平和的で素晴らしい！」

「突っ込みご苦労さまです…。」

「これ美咲さんの仕事でしょ？なんで俺がしているの？」

「勝手に人の仕事にしないで下さい。」

さてこの2つに乗るとしても、どちらも混んでいるから待つ時間が勿体ない。

「栄生せんせー！何かいい乗り物ないの？」

「ならウエ○タンリバー鉄道に乗る？」

通称西川鉄道。文字通り列車に乗れるアトラクションだ。

アメリカの西部開拓地をテーマにしているらしく、ここには4つの機関車が配属されている。

機関車にはそれぞれアメリカの川の名前が付けられている。

そこら辺の遊園地と同じおとぎ列車と同じ？甘いね！

実はこれ本物の蒸気機関車らしい。と言つてももくもくと黒い煙が出るわけじゃない。石炭を使っているわけでもないからね。そこまでのエネルギーが要らないということ。

そしてモノレールと同様、全て違う色に塗られているのだ。これもひっそりとした楽しみなのだが、派手に塗り方が違うのでこっちの方がワクワクする。

実際一部の列車は形が少し違うらしいので、乗る機会があったらちよつと注目して欲しい。

デイ○ニーオタクからだ和西川鉄道は子供向けに指定されがちだが、鉄道オタクから見たら魅力のあるアトラクションなんだ。

「でもいっぱい並んでるね。」

「これぐらいならすぐ乗れるさ。ほら…。」

「確かに減りが早いですね。」

西川鉄道は複数で走ってるかつ、1編成に乗れる客数が多い。

流石は首都圏の鉄道？って言うべきか…

そして欧米らしいデザインの間車プラス、この辺りの風景は日本らしくない街並みなので、万いかずに海外に行った鉄道写真が撮れたというパワーワードが生まれる。

「次で乗れるみたいよ！」

「運良く一番後ろの席に座れそうだな。」

「いや〜最高の旅でしたね〜！」

「これで感動します!？」

所詮子供向けなので、大人が満足するクオリティでは無い。しかし乗れることがいいので感動ものでしょ… うん！

「それで、先生の魅力のあるアトラクションはまだあるんですか？」

「国の方はもうないね。昔はトウーレンタ○ンに路面電車が走ってたけど…。」

残念ながら今は廃線あとを巡るような感じになっている。

幼少期にしか乗ったことがないから覚えてないが、確かメルヘンチックな路面電車が八の字に走ってたと思う…

「という事は海の方にあると?？」

「鋭いね。実は海にも魅力のある列車があるんですよ。その名もエレクトリックレールウェイ！」

園内の2つの駅を結ぶこの鉄道は、高架鉄道と呼ばれる列車だ。

そもそも高架鉄道とはなんぞやということだが、まあ文字通りだな。ただ高いところに走っているわけじゃない。

東京の地下鉄が全て建物3階ぐらいの高さに走っているというイメージだろう。

高架鉄道の代表はアメリカのシカゴの電車なのだが、縦横無尽に伸

びる線路は圧巻。まあ迷いやすいだろう。

「話を戻すと、エレクトリックレールウェイの高架は木造で出来ているから結構いい音がする!」

「耐久的に大丈夫なんですか?」

「木材を舐めちやあかんよ。昔の鉄道建築物や列車はほとんど木材なんだから。なんならレールが木のところもあつたぐらいだから。」

「ええ...」

環境が悪くなる為、今は木造列車を作るなんてあまり聞かない。仕方ないことなただけど...

「でも、先生も楽しんでてよかったですよ。」

「ここに来たのは不本意だけどな... まあ悪くないって感じ?」

「あはは... 美竹さんと同じこと言ってる...」

ここまで来て、「楽しくない、帰りたい」と言っても無駄だしね。仮にそんなコンセプト持っていても、君たちなら覆せるでしょ。

「みーくん、せんせー! 次これに乗りたい!」

これはビッグサンダーマウンテン。いや絶叫系じゃん!

確かに鉱山列車をイメージしているけど、俺はこれを鉄道と認めないからな!

適当に理由付けて避けないと...

「でも混んでいるから、やめた方が...」

「あら? 待ち時間10分だって。すぐ乗れるわよ!」
なんで混んでないんだよ!

うわあああああー死にたくない!!!

この後めちやくちや酔った。

18話 誰が客を乗せると言った？

「いつひひひあーおつかしおほつ… あっつつひやつひやつひやあゝ
ゝゝ」

「ちよつと！そこまで笑うことはないでしょ!？」

「酷いよ先生」

「だって、だって… ブツ！」

「あ、また笑った！」

人間笑いを堪えるのに苦労することが多々ある。

現に堪えなきやいけないのに、自然と腹からこみあがってくる。世の中これをツボるとでも言う。

じゃあなんで俺はツボったのか？まあそれは5分前の出来事だった…

「先生ちよつといいですか？」

「おや、彩さん。それに香澄さんと友希那さんまで。珍しいね」

と言いつつ、ボーカル組で集まるならそう珍しいメンバーではない。ただ蘭さんとこころさんがいないけどね。

「こんどのロケで2人にも出て貰うんですよ。」

「ロケ？なんの!？」

「ネコカフェの。」

ネコカフェ？ニヤンちゃんと戯れながらお茶を楽しみあれ？

メンバーは… 友希那さんと香澄さん…

「あくなるほどな！」

「私達の顔を見て納得しないでちようだい！」

だって隠しきれないほど溢れてる猫好きと、自称お星さまの髪型だけど、どう見ても猫型の髪だから納得するでしょふつつう！

「私の友人も呼んでと言われて、それで2人に出て貰うことになった

んですよ。」

聞くと、新しくオープンするネコカフェの取材をするらしい。

そして2人は客人役をやるらしいけど… それヤラセにならない？

「それで、当日最寄り駅まで自分で来いと言われたけどそれが分からないと。」

「すごい先生！お見通しだ！」

「なんか分かって来たんだよ…」

もう何回聞かれたんだが…

「それで何駅なの？」

「実は地図アプリを使ったんです。」

先日、地図アプリを使って最寄り駅を調べるところを教えた。

だいたい施設のホームページに、最寄り駅が載っている。それももちろん間違いではない。

しかしわずか1分や2分の差で別の駅から歩いていけるケースもある。

だから一度地図アプリを見て、本当にその駅からしか近くないかを調べることを勧めた。そうすれば、最低運賃で行けるし、余分な乗り換えが必要ない時がある。

「それなら川崎貨物ターミナル駅が近いんです。これ何線なんですか？」

「か、川崎貨物ターミナル!？」

この子達マジで言ってるの？

「はい！」

マジだった…

あ、お腹がヒクヒクしてきた！

「川崎貨物ターミナルはね…」

「なんか神奈川臨海鉄道という路線らしいのよ。」

追い討ちかけないで！ダメ、もう限界…

「ブハッ！」

『?!』

そして今に至る。

「いや〜ほんとごめんって…ここまで無知だったなんて思わなかったからさ〜」

「さりげなくバカにしてる…」

「じゃあ解説の前に本題ね。川崎貨物ターミナル駅は一般人が行くことはいけない。だから、バスかタクシーで近くに行くしかないね。」

「だからあなた笑っていたのね。」

「そうだよ。真顔で貨物ターミナルに行きたいと言えば笑うよ。」

「私たちは乗れない…つまりお客さんは乗れないってことだよね？」

「そんな鉄道会社ってほんとにあるんですか!？」

いや、現に神奈川臨海鉄道という会社出てきてるでしょ!？」

「それは法律大丈夫なの？」

「なんで？」

「だってお客さんを乗せなきゃ…」

「そんな決まりはないよ。」

『え〜!?!』

法律で決まっているのは、主に安全面だ。だけど経営方針に関しては全くではないと思うけど定められていない。

つまりどんな物や人をを運ぼうか、それに見合った対価を貰って、安全面上問題なければいいのだ。

外国に関しては貨物目的で開通した鉄道も多いんだよ。

「貨物メインにしている鉄道は数少ないものの、珍しいことでは無い。」

「でもそれって需要あるのですか？」

「そりやあるさ。君たち全国的に鉄道貨物輸送をしている会社知ってる？」

「え!?聞いた事ない!」

「じゃあ山手線や京浜東北線は?」

「JR東日本でしょ?」

「東海道新幹線は?」

「JR東海ですよね?」

「その通り!じゃあこの赤い機関車は?」

「これもJR東日本じゃないんですか?」

いい感じに引つかかってくれたね。

「これはJR貨物の機関車だよ。」

「そんな会社があるんですね!」

「地域名が入ってない?じゃあこれが!」

「彩さん鋭い!これが全国の鉄道貨物輸送をしている会社だよ。」

国鉄が民営化された時に分離された会社の1つ。会社の名の通り、貨物輸送だけで旅客営業は一切やっていない。

「でも、そんな線路見た事ないわ。」

「一応専用の線路はあるけどね。ほとんどは借りている状態なんだ。」

都心では旅客線を妨害しない為別の線路を走っている。これは片方が大幅に遅れると、もう片方にも混乱が生じてしまうから。

しかし、そんな線路を全国各地に敷く土地もお金もない。だから本数がそこそこの地域は借りて走っている。

「専用の線路があるならそこに普通電車も走らせばいいんじゃないの?」

「そうはいかないんだ。大きな理由はさっきの役割が果たせなくなるから。あとは需要が見込めないのと、駅などを作るスペースがないからかな?」

ほとんどの貨物専用線や、貨物鉄道は工業地帯や山間部を走っている。とてもじゃないけど集客があるとは思えない。

水島臨海鉄道と鹿島臨海鉄道は旅客営業もやっているが、どちらもディーゼルカーのローカル線だ。

今の日本では、旅客と貨物を両立している会社。また貨物を副業でやってる会社はない。

「認知度は少ないけど、物流を支える為には必要不可欠な存在なんだよ。」

「確かにニュースで、鉄道輸送がまた認められていると聞いたことがあるかも！」

「え？なんでなんで！」

「それは一度にたくさん荷物が運べるわりにCO2の出る量が少ないからじゃないかしら？」

「友希那さんその通り！この見直しのおかげで一時的に落ち込んでいた売り上げもまた上がっているらしい。」

せっかく川崎貨物ターミナルの近くに行くならば、そこも見えて来たら？と提案したら「は〜い」と可愛く返事してくれた。

「そういうば先生も一緒にどうですか？」

「俺はいいかな。動物に興味ないし。」

「そうなんですな..」

「ぶつちやけ猫とカフェと一緒にしなくてもと思うし。」

「..... は？（威圧）」

この後の授業中友希那さん視線が超怖かった。

19話 ありがとう…そして、さよなら!

「ザリガニ! 誰に投票しても、おんなじやおんなじや思って!!!」

「誰かあのうるさい先生止めて。」

「美竹さん。いくらなんでも無理だと思っわ。」

「これいつまで続くんだろ?」

「あくすつとしたぜ〜」

『長いわ!』

いやそんな泣いてないでしょ?

時間は… ほん30分しか経ってない!

「それでなんで泣いていたんですか?」

麻弥さんが聞いてくる。

「君たち何も知らないで放置してたのか! 酷いよ全く…!」

「何も知らないで泣かれているこっちの身にもなっってください。」

「そもそもニューズみてないな!」

「コ○ナばっかで何も…!」

間違っではない。ないけども!

「700系新幹線が引退するんだよ? 悲しいと思わないのかい?」

「冒頭のセリフ関係ないじゃん…!」

なんでそんな平然としてられるの!?

700系新幹線とは、1999年にJR東海とJR西日本が共同開発した新幹線。

省エネを目的とした開発で、東海道新幹線と山陽新幹線を突っ走っていた。

その後性能アップしたN700系新幹線に置き換えられ、ついに東海道新幹線引退となってしまった。

現実とガルパ界の時間軸がおかしい？自分の頭で修正して読め（何様）

「と言っても完全に無くなる訳じゃないからね。」

『はあ!?!』

「山陽新幹線のレールスターはまだ走るし、台湾に行けば似たやつ走ってるし。」

今回無くなるのは16両で白く、青いラインのやつ。

色は違えど、大阪から西に行けばまだ乗れるし、台湾新幹線も700系をベースにしているからまだ見れる。

「でも近くからいなくなるの悲しいじゃん！そうでしょつぐみさん？」

「え、え〜!?!そ、そうですね！」

「つぐみに同意を求めないでよ…！」

「だから悲しいんだよ。ああ…。花女組の時にもまた泣いてしまうのか…。」

実は花女組は学校側の用事でおやすみ。ここには羽丘組しかいない。

「ちよつと花女の時は抑えたらどう?。」

「リサさんはこんな僕を止められるのかい?。」

「無理、だね…。紗夜たちご愁傷さま…。」

ちなみにこんな号泣してあれだけど、700系に特別思入れがあるわけじゃない。

「栄生。」

「どうした蘭さん?。」

「今思ったんだけど、なんで電車の引退ってニュースに取り上げられるほど重要視されてるの?。」

「そりゃ人々の生活の足だから?。」

「それなら車も…。」

「車を持つ人と持たない人がいるよね?だから人々の生活の足とは言

えない。それに販売中止になっても中古とかでも見掛けるからね。」

「ならバスや飛行機はやらないの。」

「電車の置き換えの目的は大きく分けて2種類ある。1つは単純に古いやつと新しいやつを置き換え。」

「あと1つは？」

「あと1つは性能アップの為の投入。」

今回の新幹線のように性能アップをした車両を投入する際、その性能についていけない車両は邪魔となる。

もちろん後者の車両は、デビュー当時は最新の技術搭載で登場した。けど技術は常に上を目指している。だから年数が経てば劣ってしまおうし、今新しい車両もいつか邪魔扱いされて消えてしまう。

そしたらなぜバスや飛行機は報道されにくいのか？単純に見分けがつかないからだ。

今回の700系とN700系は写真を見れば一目瞭然で違いが分かる。

しかし飛行機やバスなんてほとんど一緒だし、そもそも変わったところで一般利用者は何も変わらない。

鉄道の場合、特に新幹線は所要時間が短くなることから注目される。そして近距離の人も遠距離の人、色んな人が使う公共交通機関だからこそ報道されやすいのだ。

「そしてバライティ豊かなのもあるね。」

「その理論なら車もそうでしょ？」

「車は使う人が限られるからね。馴染みがない人はない。それに歴史と言ってもほとんどが馬力。ハイパワーが出ても日本の道路じゃ発揮できないよ。」

それに車は中古という奥の手がある。なので生産中止になったところでって話。

逆に鉄道のほとんどは解体の未来が待っている。普通電車は地方の鉄道か、海外に譲渡されるけど、今回の新幹線700系は他に活躍出来るところがないからバイバイだ。

「そういうことで、700系新幹線に大きな声でお礼を言いましたよ。」

！」

「え… やだ。」

「ありがとー！！！！そして、さよなら！！！！」

「うるさいうるさい。」

「さあこれですつきりしたゾ。」

「それじゃ授業を始めます。」

「やっと始まるのね。」キーンコーンカーンコーン

チャイム鳴っちゃったな…

「延長していいよね？」

『嫌だよ帰る！！！！！！』

20話 混乱を招く山陰旅くタイムスリップく

おかしい…

「何がおかしいのですか？」

「切符が変わった…」

「どういうことですか？」

「説明出来るならしたい。」

「なにに？なんか面白いことが起きたの!？」

「日菜！あなたは全く…」

今東京駅にいるのは俺… 栄生と、氷川姉妹の3人だ。

時間は深夜に近い時間。まだまだ人波は絶えなさそうな時間に何をしているのか？

それは氷川姉妹のロケ撮影に行くためだ。世間では日菜さんは大の姉好きだと知れ渡っている。

それで今回姉の紗夜さんの了承もあり、姉妹で旅をするという企画が発生した。

紗夜さんの都合により、スタッフ達とは現地集合に。そして俺は引率係になったと言うわけだ。

そして『サンライズ出雲』に乗って山陰方面へ向かう予定だったはず…

だけど切符をもう1回確認したら内容が変わっていたのだ。

「誰かにスられてしまったとか？」

「これはスリ関係ないよ…普通ありえないはずだから。」

「何が変わったの？」

「乗る電車…いや列車が過去のものに変わっている。」

『?』

2人が困惑するのも無理はない。なんなら自分でも理解に追いついてないから。

持っている切符に書かれていたのは『寝台特急 出雲号』だから。

「おねーちゃん！青い電車が来たよ！」

「ほんとに来やがった...」

寝台特急出雲はいわゆるブルートレインの1種。随分昔に廃止になったはずなのに何故か走っており、それに乗る。

そして東京駅にもある違和感がある。

周りの電車はいつの間にか少し前の車両ばかりなのだ。

しかしブルートレインの黄金期だったはずなのに、九州方面の列車が1本もない。ただ『瀬戸号』はあるみたい。

そして周りに鉄道ファンは集まってない。つまり普通の光景なんだ。

これらの結論から見ると、車両だけがタイムスリップしたみたい。普通のタイムスリップよりもかなり奇妙だ。

まあなったものは仕方ない。

俺らが乗るのはB寝台らしい。(希望した訳じゃない)

「君たちはどこで寝る？」

「私上がいいー！」

「なら私は日菜の下で寝ます。」

ほんとに仲がいいんだな君たちは。

「じゃあおやすみ。明日早いから遅くまで起きてるなよ。」

「おやすみ(なさい)」

古い車両だけあって、揺れが少々激しい。これがいいゆりかごになるので、眠りにつくのは容易なことだった。

「ふわ〜眠いよお...」

「だから早く寝てて言ったのに...」

「そうですよ日菜。夜更かししていると体に悪いですよ。早く学校の支度しなさい。」

「いや紗夜さんもめっちゃ寝ぼけてますやん。」

早朝に京都に着いて、昼間は姉妹の京都観光。夕方には特急に乗って城崎温泉で一泊する予定らしい。

スタッフさんはA Dの北道さん、カメラマンの宮城さん、横浜さん、マイクマンの山城さん、その他の広島さん、福岡さん、に、事務所マネージャーの埼玉さん。

途中外れたりするが、概ねこのメンバーと同行して行く予定だ。

そして京都撮影は無事終了。これから特急に乗って、城崎温泉の宿まで向かう予定だ。

「特急… あさしお?」

「せんせーどうしたの?」

「いや、なんでもないよ。」

この現象には驚いた訳じゃない。ただ『あさしお』という名前はすでに消えている列車名だ。だから少し戸惑っている。

「あれ? 栄生先生? おーい!」

「あれは… 香澄さん!? それにポピパのみんなも!」

「すごい偶然ですね…!」

「栄生先生。紗夜さん、日菜先輩こんにちは。」

こんな離れた土地でも出会うことがあるとは…

そしてポピパともう一人見慣れない男の子がいた。

「あなたは栄生学さんですよ?」

「そうだよ。俺を知ってるってことは動画の視聴者さんかな?」

「そうです。いつも観てます。俺は南 達仁と言います。今日はポピパの人達と旅行に来ました。」

「ご存知の通り、栄生学です。今は香澄さん達の先生もやっています。」

視聴者のわりには興奮した様子が見られない。結構冷静なイメージがある。

聞くと、彼らも同じ列車で城崎に向かうだとか。

「僕はここに残ってロケ地の挨拶をして来ますので、先に行って休ん

「でいて下さい。」

北道さんは遅れて来るみたい。

「分かりました。先に行つてますね。」

特急あさしおは定刻で出発した。

知つてる顔が大勢揃つているため、隣の席ではガールズトークで盛り上がっている。

「達仁くんは行かなくていいのか？」

「いいですよ。あの輪に入れる勇気がありません。」

「それもそつか。」

1人ポツンと座つてた達仁くんに話しかけてみる。

「実は先生に1つ言つておきたいことがあります。」
「？」

「あくまでも予感ですが、何か嫌な予感がするんです。」

「嫌な、予感？」

「実は俺探偵をしているんです。そこからの勘ですかね？なんかそう感じるんですよ。」

「まさか生徒達に危害があるつて訳じゃ!？」

「何とも言えません。ただあいつらには絶対言わないで下さい。」

「確かにパニックになりかねない。」

「なので先生だけでも承知してして下さい。」

俺が分かつたと言うと、彼はお手洗いにいった。

そして悪いと思いつつ、彼のことを調べたら有名な鉄道探偵だとか。

(鉄道探偵すら特急あさしおに乗れる疑問が湧かないのか：：)

ちなみに今の時代だと、『きのさき、はしだて、まいづる、たんば』と別れており、新大阪発には『こうのとり』という名前で走っている。

そして一行は城崎温泉に着いた。

城崎温泉の撮影はなく、もう明日までフリーみたいだ。

そして香澄さん達も同じ宿に泊まる。

「さーや！卓球しよー！」

「お、いいね！おたえもやる？」

「いいねやろうよ！」

「私有咲ちゃんみたいになりたいから牛乳たくさん飲む！」

「りみ…それはどういうことだ？」

「ポピパのみんなは元気ですな。」

「そうですね。ただ…。」

「日菜まで混じって遊んでますね。」

「さすが日菜ちゃんですね。」

保護者化とした俺、マネージャー、紗夜さん、達仁くんは椅子に座りながらゆつくりとお茶を飲む。

ちなみにマネージャーを除くスタッフ陣はすでに大広間飲み会が始まっている。

「さて、これで挨拶とお礼が済んだし… 今日中には城崎行けそうだな。」

ポツーン

「それにしてはここの路地狭いな。」

「北道さん。」

「あれ？なんで君がここについて何をする!? やめろおおおおおおお
おおお!!!」

21話 混乱を招く山陰旅〜城崎で起きた矢先、出雲での異常〜

「え!?!北道さんが殺害された!?!」

城崎出発前、マネージャーの埼玉さんから来た電話により、緊迫した空気が流れる。

埼玉さん曰く、警察からの電話で、身元確認で緊急連絡先で埼玉さんの携帯番号があったから連絡をしたと。

事件の捜査は警察に任し、俺らは撮影を続けるかどうか…

「では僕が上司と相談してきます。」

広島さんが電話をするために席を離れる。そして話し声が聞こえてくる。

「せんせー…」

「大丈夫だ日菜さん。今は冷静になろう。」

「確認したら、事件はあちらでやるので撮影を続けて下さいとのことです。」

おいおい…こんなんで続けていいのかよ?

確かにこの中から犯人はいなさそうだけどさあ…

「アリバイを知りたいので昨日の皆さんの状況教えてくださいませんか?」

「達仁くん!?!」

この子事件解決する気満々だ…

「と言ってもみんな飲んでたから記憶が曖昧なんだよな〜」

「僕その後電車の映像を撮るため、豊中や和田山に行ったんですけど、知ってる人は見てないですね。」

カメラマンの横浜さんが重要な情報を教えてくれた。

しかしそれは手掛かりになるかどうかは…

「とりあえず行くなら行きましょう!列車の時間が迫ってます!」

マイクの山城さんが催促した。

そしてロビーから出る時、資料が入ったファイルが置いてあった。「ん？このファイルは…領収書？」

中には予算や運賃、その他の旅費が書かれた紙が入っていた。

「あ、栄生さんありがとうございます。危うく忘れるところでした。広島さんに渡しておきますね。」

「あ、福岡さん。お願いします。」

そして混乱が収まらないまま、次の目的地…出雲に向かった。

快速電車と特急電車の乗り継ぎで出雲市までやってきた。

「特急やくもだけはあまり違和感がないな。」

「普通の特急じゃないんですか？」

「あ、有咲さん。やくもは昔も今も381系という特急電車を使っているんだ。今は塗装と内装が変わっているけどね。」

「よく分かんね。」

今のやくもに使われているのは『ゆつたりやくも』。白と赤色がベースとなっている。

そして少し前、改造前の色は主に紫。

そして381系の特徴は自然振り子装置を搭載していること。これによりカーブでもスピードを落とさずに走れる。

ただ他の車両と違い、一昔前の装置なので制御は出来ない。つまり無駄に大きく傾いたり揺れたりするのが激しいので酔いやすいとか。

一部の鉄道ファンでは『ぐつたりはくも』と言われているぐらいだ。

「でもそんなに揺れてないよ。」

「主にカーブが多いのは伯備線だから、この区間はそんなカーブはないんだ。」

「ここからは車で移動します！用意したロケバスに乗って下さい！」

ロケバスに乗って向かうは出雲大社。10月に日本中の神様が集まる場所だ。だからこの地域は『神在月』となっている。

バスと言ってもハ〇エースだから一気には乗れない。

ポピパと達仁くん。俺と氷川姉妹とマネージャー。そして残りのスタッフ陣だ。

「そういえば自然にポピパ達の分も用意されているな。」

「一緒に撮影でもするのでしようか？」

「え〜いいじゃん面白そう〜」

道中は渋滞で少し予定が狂ってしまった。流石有名観光地…

そして出雲大社について車を降りた途端…

「氏ねえええ!!」

「な、なんだ急に!」

俺たちに目掛けてナイフを振りかざす男がいた。

「くっ…この野郎!」

間一髪で蹴りを入れられたのが幸いだった。たじろいだ男は攻撃が出来ないと悟ったのか、すぐに逃げてしまった。

「あ、待て!」

人混みに紛れたため、追うのが難しい。

「みんな〜大丈夫!」

「香澄さん!よかった…君たちには危害はなかったのか。」

あの犯人は誰だったんだ？

ターゲットが自分だったら明らかに目的が果たせははずだ。なら男のターゲットは自分じゃない？

「皆さん着きましたね。時間も押していますので先に次の特急券を渡ししておきますね。では予定通り撮影を始めて下さい。」

氷川姉妹とカメラマンとマイクマンは撮影に向かった。

「あ、広島さ…「待って!」」

さっきのことを広島さんと福岡さんに話そうとしたら達仁くんに止められた。

「このことはあまり話さない方がいい。」

「達仁くん!ポピパは?」

「あいつらはお参りに行ったよ。じゃなくて、先生達が襲われそうになったことは言わない方がいい。」

「なんでだ?みんなに危険を周知した方がいいだろ。」

「駄目だ。たぶん犯人はこのクルーの中にいる。」

え?!嘘…

「だから先生も出会った時から今までの状況を教えて下さい。」

「えっと京都から…」

そして俺と達仁くんは近くのお茶屋さんに入って疑問などを次々と話し合った。

「あれ紗夜さんから電話だ… はい。宮城さんがやられた!?!」

「!?」

「分かった。すぐ戻る。」

「宮城さんがやられたんですね?」

「ああ… もうロケはやめた方がいいかもしれない。」

「それに次の目的地は益子… 恐らくそこで決着つけるだろう。」

そして達仁くんの目が光った。

「次はあの人が危ない!」

22話 混乱を招く山陰旅の終焉

出雲市駅に戻った俺たちは、乗る指示だった『おき』の最終を見送った。

「いいんですか乗り遅れて？」

「これでいいんです紗夜さん。事件が全て分かりましたから。」

「先生、達仁。それ本当なの？」

「そうさ沙綾。ただ次のターゲット、そして犯人はさっきの『おき』に乗っていたと思う。ホントはターゲットにも声を掛けたかったけど・・・」

「連絡手段が はなかった・・・」

ただ達仁くんは警察にも顔見知りで、今回のことを伝えており、益子でスタンバっている。あとは車内で殺人事件が起きないことを祈るだけだ。

「でも列車に乗る前や途中でパパッと捕まえちゃった方が良くない？」

「予想が当たってれば、本当のターゲットがいない限り、大きく行動を起ささないと思うから。」

「それって誰なの？」

「それはまだ言えない。」

ここにいる誰かなのは間違いない。だけど犯人が逮捕されてない限り、パニックになるのを避けるため達仁くんは喋らないのだろう。

「でも最終逃したら行けないよ・・・」

「大丈夫、『おき』の最終は出たけど、特急はまだあるから。」

実はこの区間には二つの特急が走っている。あと一つは『まつかぜ』。そのまつかぜはまだ走っているんだ。

なぜわざわざ二つの名前があるのか？それは役割が少し異なるため、その混乱を避けるためだ。

『おき』は新山口から山陰方面に結ぶ特急。『まつかぜ』は山陰内の特急列車という違いがある。

そして自由席特急券なので、区間ならどの特急でも問題ない。

「わざわざ違う特急に乗るなんて、天才なの？」

「まあ正直名前だけが違うけど・・・」

一方その頃、

「な、何をする!?!」

「福岡も犠牲になってもらう。さらばだ!」

「そこまでだ!!」

「ツチ…………なぜサツがここにいる?」

「貴様を殺人未遂で現行犯逮捕だ!」

「クソ!あいつら・・・」

「それに2人の殺害容疑もあるな?」

「それは知らない。」

「まあ探偵さんが来るまで待ちますか。」

俺らは遅れて益子に着いた。はつきり言っておきもまつかぜも使っている車両は同じ。もしどつちに乗るか迷ったら好きな名前か用途で選んで。

「やっぱりお縄になっていきますね広島さん?」

「あなたが犯人だったんですね・・・」

手錠をつけられた広島さん。たぶん福岡さんを襲おうとして逮捕されたんだろう。

そして何が起きたか未だ把握出来ないスタッフ陣。唯一マネージャーが俺らのところに寄っていた。

「もう心配したよ急になくなって。」

「すみません。栄生先生が・・・」

「わざと遅れて待とうって言ったから。」

「ここから推理の解答編だ!みんなはガバガバなストーリーだけど、推測は出来たかな?」

「改めて、今回の被害者北道さん、宮城さん、そして栄生先生を殺害しようとした犯人は広島さん。あなたですわね？」

「違う！俺はやってない？根拠なしに言わないでくれ。」

「まずは北道さんの件ね。あなたは一回城崎に着いてからまた京都に戻って殺害をした。」

「それはないね。そもそも横浜さんは知り合いを見てないと言ってるから。」

「確かに。だけど別ルートだったら見かけることは出来ない。そうだろう？先生…。」

「恐らく横浜さんが撮影をすることを知ってたから避ける必要があった。実は豊中から京都丹後鉄道というのが走っている。それで天橋立経由で京都に向かったんだ。」

「そんなのはデタラメだ！」

「だけど領収書に何故か2人分だけ他よりも運賃が高い。それも違う値段で。」

「なぜそれを知ってる？」

「なぜでしょうね？そして京都駅の嵯峨野線ホームで監視カメラを映らないようにするため、別の手段で新大阪経由で行き来した。」

京都と新大阪は新幹線でも新快速でも行ける。

では城崎温泉までは『こうのとりのり』いや、この時代は『北近畿』に乗ったのだろう。

じゃあ天橋立からは？実は今だと使えないある特急に乗っていた。

それは『文殊』廃止された列車だ。恐らくこの現象を利用した手段だろう。文殊に乗るためにこの現象を起こしたのか、また偶然に過ぎなかったのかは分からない。

「でも他にやれるやついるだろ？なんで俺なんだ！」

「あなたは上司と電話してロケ続行の指示を受けましたね？」

「そうだけど？」

「お巡りさん。やつの履歴を確認して下さい。」

警察が広島さんのスマホを取って調べると、昨日の履歴は一切ない

と言っていた。

「つまり電話しているフリをして俺たちを道ずれにした。本当の目的を果たすため。」

だから北道さんを先に殺ったのか。予定を知っているから北道さんが独りなるタイミングを狙った。そしてロケの主導権を握ったのか。

「仮に北道さんを殺っても、宮城の殺害や、栄生先生への襲撃には関係ないはずだ。」

「そうだね。まず確認しますか。ロケバスはポピパと俺組。そして先生と氷川姉妹プラスマネージャー組。では山城さん。あなた達はどうやって移動しました？」

「私達はタクシーで二手に別れました。私と横浜と福岡さんと宮城と広島さんとで。」

「だろ？タクシーで乗って行って渋滞にハマるはず。だから先生の襲撃は出来ないし、できてもすぐバレる。」

「じゃああなたがタクシーに乗ってなかったら？」

「はっ。」

「そう。一畑電車に乗れば渋滞に捕まることなく出雲大社に行ける。渋滞を知っていてわざわざ車を手配したんだろ？」

一畑電車は山陰地方唯一の私鉄。黄色に青いラインが特徴で、電鉄出雲市駅から出雲大社の最寄りまで電車で行ける。

そして一畑電車に関する面白い踏切があるんだけど、気になった人は調べてみてね。

「そして広島は先回りした。確かに待機してすぐに襲うことができる。」

「じゃあ先生を狙ったのは領収書を拾ったから？」

「何!?福岡意外にも知ってたのか!？」

そうか... だから福岡さんが狙ってたのか？

「その反応だと栄生先生を狙ったわけじゃないのがバレたね。」

「しまった...」

「そもそも先生を殺れるチャンスは大きかったのに、何故か逃げた。だから先生が真のターゲットではないのがわかる。」

もしあの時広島さんに直接渡していたら…そして出雲の時に襲われたこと言ってたらターゲットにされていたのか。彼はそこまで読んで俺の行動に気をつけていたのか？

「そして宮城さんは広島がタクシーに乗ってないのを知っている。そして襲ったのも知っているんじゃないのかな？だから予定外だが被害をした。」

「ねえ達仁？なら広島さんは誰を狙ったんだ？」

「そろそろ本人から言ってもらおうか？」

広島は観念したのか、ため息をつけてから語り始めた。

「そうだよ。そのガキの言う通り、犯人は俺だよ。最初は殺すつもりはなかった。」

出た。犯人が必ず言うセリフ『つもりはなかった。』

「北道の件はあんたの言う通りさ。出雲の先回りもな。」

殺るつもりあるやん。

「俺は氷川日菜が恨めしくて仕方なかった。なんでも出来て、それで人を下に見る態度が！」

「妹になんてことを…。」

「紗夜さん落ち着いて。」

「それで計画を立てた。そして出雲までは上手くいったんだ。けどロケバスで日菜を狙ったが、運悪くその教師が一番ドアに近かった。そこで一旦引いて逃げたところに宮城を載せたタクシーが来た。」

この後の広島供述はこうだ。

宮城さんは広島と一緒にタクシーに乗れなかったのは上司に電話するためだと思っていた。

しかし偶然にも武装した姿を見られてしまい、撮影中には問い詰められたのだと。

そして他の目を盗んで宮城さんを殺害。

元々口封じのため益子で他のメンバーを連れて片付ける予定だったらしい。

ポピパと達仁くんも同行させたのもこれが理由だって。

「これに嘘はないな?」

達仁くんが確認した。

「これが全てさ。だけど失敗には終わりたくない!喰らえええええ!!!」

警察を振りほどいて日菜さんに襲いかかる広島。

だけど日菜さんの前に紗夜さんが立ち塞がったため、広島は止まらざるを得なかった。

「妹を守るのは姉の務めですから!」

そしたら次は香澄さん達が、

「先輩を守るのは後輩の役割です!」 っと。

さらに達仁くんが、

「女の子は男が守るものだ!」 って。

全くみんな足が震えているぞ。達仁くんは例外だけど...

「年下... いや、生徒を守るのは俺の仕事だ!!!」

「どいつもこいつも... まとめて殺してやる!!!」

俺にナイフを向けて来たので、手を抑え、一発蹴りをお見舞いする。

たじろいだところで警察に取り押さえられ、強制連行された。

「一件落着だな?」

「そうですね。すみません先生。俺が変なこと言ったからこうなっちゃって。」

「いやいや、君が察知してくれたおかげで生徒達は何も危害はなかった。俺こそ巻き込んですまなかった。そして達仁くんがいたから解決出来たんだよ。」

「ありがとうございます。ですけどこれから取り調べが待っていますよ。」

「うわーめんどくせえ...」

「たぶんここでお別れですね?」

「そうだな。香澄さん達をよろしくね。」

「はい。またいつか一緒に旅をしましょう。」

「それはいいな！」

こうして混乱を招く山陰旅は無事に終了した。

翌日

撮影スタッフは急遽テレビ局に向かうため、朝一の飛行機で東京に戻った。

あとは俺に任し、紗夜さんと日菜さんとゆつくり観光してくれと。昨日のショックでそんな余裕ないんだけどね。

香澄さん達と達仁くんは旅行を続行すると。彼らは『はくと』に乗って行くんだとか。

よく続けられるなど言ったら、香澄さんが「慣れてますから。被害者を見てないだけマシですよ。」だって。出来れば慣れて欲しくないと思っただけじゃないはず。

そしてはくとに乗る理由。はくとは漢字にすると『白兔』。まあたえさんのリクエストだろう。

「せんせー帰ろうよ〜」

「私も疲れたので早く休みたいです。」

「そうだね。だけどーっただけ見て欲しいものがあるんだ。」

そして『スーパーおき』に乗って津和野に行く。

いつの間にか元に戻っていた。

津和野で待っていたのは…

『蒸気機関車?!』

そう『SLやまぐち号』だ。しかも今日は重連の運転。

重連とは機関車が2両以上繋いで客車を牽くこと。

SLはC57とD51。詳しい説明は割愛して貰います。

「すっぴん〜」

「なかなか迫力がありますね。」

「だけどこの二つの蒸気機関車は元々の使用用途や性能も違う。まだSLが当たり前に走ってた時は重連なんてしなかっただろう。」

「だけど今ここで違う2種類が共に走っている。」

「まるで紗夜さん。日菜さん。君たちのようにね？」

「俺は彼女たちにピッタリな列車だと思う。」

「今は仲良しに戻っているけど、いつかまた対立するかもしれない。その時にはこの列車に乗ったことを思い出して欲しい。」

「せんせー早く早く!!」

「もう出発しますよ〜」

「おっけー今行く!」

二つの汽笛が大自然に大きく響き渡った。